

ひとつになった乙姫と白百合の現存在 ——恒久平和を念願する時限結社の超越過程——

吉田 竹也

キーワード

ひめゆり同窓会、ひめゆり平和祈念資料館、時限結社の超越、パラドクスの脱パラドクス化、霊域の観光地化

1. 序論 問題の所在

人がつくる組織は、ときにその性格を根本から変えるものである。そしてそのことを当事者が意識しないことも、まれではない。では、そうした変化は、何によってもたらされるのであろうか。新たな目的や感情の共有、メンバーの個性の創発的融合、ひとりのカリスマの活躍、外的環境の変化など、主要な要因はケースによりさまざまであろう。ただ、比較的小規模な組織であれば、そうした組織のデザインや構造の根本的変化の要因や背景をある程度特定化して記述しうるかもしれない。これが議論の出発点にある問題関心である。

本稿は、沖縄の糸満市にある「ひめゆり平和祈念資料館」に焦点を当て、その設立と運営の経緯を整理することから、非営利組織の変化について考察しようとする人類学的研究である。なお、本稿は、沖縄を含む楽園観光地の宗教と観光の関係を主題とする私の中期的な研究の一環をなす（吉田 2013, 2016a, 2016b, 2016c, 2016d）。

戦時のひめゆり学徒隊¹については、これまで文学・映画・ドラマなどのおおくの作品において取り上げられ、沖縄戦史に関する諸文献においてもかならずとっていいほど言及されてきた。また、その歴史的事実や戦後に形成された言説が、殉国美談の神話となって日本・沖縄の人々のエートスに訴えかけ広く人口に膾炙することとなったという、イメージの社会分析についても、いくつかの先行研究はある（ex. 石野 2015(1950); 川村 2016: 35-44; 北村 2009; 仲田 2005, 2008; 仲程 2012; 仲宗根 1951, 1983, 2002; 岡本 2007(1969); 山田 2010）。しかし、ひめゆり学徒隊の生存者たち——社会学や歴史学では、事故や災難に遭遇し生き残った人々をサバイバーや生き残りなどと表現するが、本稿では生存者という表現を主としてもちいる——や、彼女らの先輩であった同窓生たちが、戦後 70 余年の間にいかなる活動を展開したかを、事実に即して論じた人類学や社会学の先行研究は、管見の

¹ 今日では「ひめゆり学徒隊」という表記が頻用されるが、「学徒隊」あるいは「看護隊」といった表現および「ひめゆり」のひらがな表記は戦後の語用であって、沖縄戦時のものではない（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2008: 25, 212）。以下では、戦前・戦中については「姫百合」という表記をもちい、ただ学徒隊については「ひめゆり学徒隊」という表記を一貫してもちいることにする。

かぎり、ないようである。ひめゆり同窓会や資料館が自らの諸活動を振り返って整理する著作をいくつも出版しているため、戦後のひめゆりの足跡はそれで十分わかる、という捉え方もあるであろうが、そうした彼女たち自身の語りや活動の文脈を明らかにしつつ、いわば外部の観察者の視点からあらためて戦後のひめゆりについて整理する作業も、まったく無意味ではないであろう²。本稿は、戦後に結成されたひめゆり同窓会を組織論の観点から主題化しようとする。これが主題であるため、戦時のひめゆり学徒隊については言及を省略する。

本稿の基盤にある視座に触れておきたい。それは、アガンベン Homo・サケル論であり、中でも『アウシュヴィッツの残りのもの』に凝縮される論点である。アガンベンは、収容所内のガス室に入る前にすでに生ける屍となった「ムーゼルマン」(ムスリム)と呼ばれていた者たちこそ、アウシュヴィッツの悲劇の完全な証人であって、生き残って実際に証言した人々はムーゼルマンの代弁者にすぎない、というプリーモ・レーヴィの主張に寄り添いつつ、これをフーコーの生政治・生権力論と結びつけ、語りえないものを語りえなかった人々の言語活動と代弁者として語った生き残りの人々——レーヴィもまたそのひとりであった——、あるいは広くアウシュヴィッツ後に生きる人々の言語活動のつながりが、20世紀の生政治により分断される中で、それら言語活動の潜勢態と顕在態を含む総体のはざまに、あるいは、アガンベンの表現ではないが、それらの共振に、なお残る人間の倫理の可能性について論じた (Agamben 2001(1998), 2003(1995), 2009(1982); Levi 1980(1976/1947), 2014(2000/1986))。私は、こうしたアガンベンの議論を、地上戦によりおおくの人々が亡くなり、その後の米軍占領下で基地機能が強化され、復帰後も基地存続の中で意志選択を分断され、いまなお「戦後ゼロ年」(目取真 2006)の状態におかれているといえる沖縄本島地域の人々の過去と現在の生に重ねて理解している。そして、生き残ることなく語りえず戦争で亡くなった人々の語りえない証言を受託されて代弁する機関として、ひめゆり平和祈念資料館、および沖縄県平和祈念資料館や石垣島にあるその分館などがある、と捉えている。

第2節では基本的な概念と視点について述べる。そして、第3節では沖縄の日本復帰までのひめゆり同窓会について、第4節では1989年6月23日の資料館開館にいたる経緯について、第5節では開館後と今日の資料館が抱える課題や未来について、それぞれ記述し、最後に第6節で主要な論点を確認し、まとめる。

² 戦後のひめゆり同窓会に関する社会分析は、かならずしも十分なものではない。たとえば、岡本は、ひめゆり学徒隊の手記の中に戦争にたいする疑念や批判が存在しないことを批判的に取り上げ、それを、戦争責任の意識を欠落させてしまった戦後の沖縄の人々の意識に通じるものであると論じた。この岡本の指摘の以前に、大城は、戦後の沖縄の教職員に戦前の師範教育の影響が残っていることを批判していた。ひめゆり平和祈念資料館建設時のプロデューサーは、少女たちが「軍国少女」に仕立てられていった経緯を示すこと、殉国美談にすり替えられない、戦争の実相を語り継ぎ告発することこそ、この資料館の目標であると認識していた。この点で、当該資料館は、軍国少女を生産した戦前の国の教育政策を批判し、学徒隊がそれに無批判にしたがったことを反省する立場にある。ただ、一方で、学徒隊生存者の大半は戦後教職にあった者たちであり、彼女たちが戦後の沖縄の教育にいかなるスタンスで向かい合ってきたのかは、あまり明確ではない (福間 2014: 196-198, 204-207; ひめゆり平和祈念資料館 (編) 2000: 45-46; 岡本 2007(1969): 32; 2002a: 312, 2002b: 255; 沖縄大学地域研究所 (編) 2012: 100-101; 大城 2002a: 120-121; 櫻澤 2012; cf. 大城 2002b: 312)。本稿は、その種の社会分析に踏み込むものではないが、これらの点を含めた総括は今後の課題として残されていると考える。

2. 組織・結社・脱パラドクス化

本節では、「組織」(organization)と「結社」(association)の概念について簡単に整理した後、組織や結社が抱えるパラドクスの脱パラドクス化という着眼点について述べる。

まずは概念の確認である。ここでは、「組織」を、「集団」に一定の構造——集団原理、成員権、秩序や規範、安定した役割関係など——が備わったもの、と理解しておく(船橋 1994; Luhmann 1992(1964), 2015(2008): 221-223)。ジンメルは相互作用を起点に社会学を構想したが、その後の社会学や人類学の趨勢は、集団や組織の研究に向かったといえる。

組織という概念は人に限定されない広がりをもつが、「結社」あるいは「アソシエーション」には、自然原理にもとづくものではなく人々が自発的あるいは人為的に作りあげるもの、という含意がある。人類学におけるこうした視点の起源はシュルツの研究にさかのぼる。近年では、ディランティが共同体と結社という概念の間に設定された差異を再流動化させる議論を提示している。従来の社会学や人類学において、共同体/コミュニティと結社/アソシエーションの概念には、それぞれ均質性や閉鎖性の強/弱の差異というニュアンスがともなっていたが、コミュニティとアソシエーションとは明確に区別しがたいという理解が、今日では有力である³(江守 1985; 柄谷 2006, 2010; 川田 2009; 村武(編)1981; 中野 1994; 小田 2004)。ここでは、「組織」を共同体や結社を包含する概念として、また「結社」を人々が自発的な意志にもとづき形成する、組織の下位類型として、それぞれゆるやかに捉えておく。そして、本稿は結社としての非営利組織に注目する。

次に、着眼点つまり具体的な論点について述べる。ポイントは5つある。まず、20世紀の人類学では、組織の内的メカニズムを静態論的な視点から分析する機能構造主義的アプローチが主要な組織研究の立場であったが、組織の構造の動態論的研究をかならずしも十分展開させなかった、という点がある。上では組織を集団に一定の構造が備わったものと規定したが、本稿の冒頭で述べたように、この構造は場合によっては容易に変転する。また、その要因は内部ばかりではなく外部に由来することもありうる。ここでは、そうした組織構造の変化に焦点を当てたい。これが第1点である。

この外部要因に関しては、現代の組織や結社が、国家やネーション(民族、国民)そして産業資本主義のつくる世界システムにおいて維持存続をはからねばならない、という点がおおもとにあると考えられる。これが第2点である。藏本は、一般的に宗教組織は経済に否定的な宗教倫理を形成しこれを実践へと媒介しようとするが、経済的实践にまったくコミットしなければ、経済に否定的なその宗教倫理を社会に浸透させ自らの組織を維持・拡大することは困難である、と指摘する。藏本は、マックス・ヴェーバーに言及しつつ、これを「宗教的理想と経済的現実のジレンマ」と呼ぶ(藏本 2014: 8-9)。藏本の指摘は、現行の世界シ

³ ディランティは、コミュニティが、社会も国家も提供することができない集合的な善へのコミットメントという結社的な原理に根差すと論じる(Delanty 2006(2003): 267)。さかのぼれば、テンニースも、アソシエーションをゲマインシャフトとゲゼルシャフトの両者に関連づけて理解していた。アンダーソン、ディランティ、バウマンらは、想像や記憶やパーティクルなものリアリティを視野に入れ、現代社会におけるコミュニティを構築主義的な視点から概念化する(Anderson 1987(1983); Bauman 2001(2000): 217-260; Blanchot 1997(1983); Delanty 2006(2003): 46, 195-196; Tönnies 1957(1887): 130-131)。

システムの内部に存在する宗教組織という歴史論的枠組みを超え、組織が一般論の水準において抱える構造により注目したものはあるが、他方でそうした構造を具体的な社会的・歴史的過程の文脈において理解することも重要であろう。

私は、ルーマンの社会システム理論を参照し、藏本のいうこのジレンマをパラドクスと読み替え⁴、組織の動態に着目する観点からこれを捉えたいと考える。これが第3点である。すなわち、ある組織が何らかの具体的な動的過程に入ること、潜在的に抱えていたパラドクスは脱パラドクス化される、というようにである。むしろ、場合によっては、矛盾が顕在化し重大な社会的混乱や葛藤が生じることもある。そもそも、ここでいう脱パラドクス化は、あくまである観察にもとづくものであって、別の観察にもとづけば、おなじ事態は矛盾の単なる繰り延べや露呈、あるいはむしろ拡大や強化、つまり再パラドクス化にはほかならない。たとえば、沖縄本島の米軍基地の存続は、ある立場からは（国家の外交・防衛上の）問題の解消や低減に向けての対処として評価され、別の立場からは（地域社会に生きる人々の生活や人権に関する）問題の放置や悪化として評価される。ある社会過程が脱パラドクス化なのか再パラドクス化なのかは、観察の視点によって異なる評価となる。ただ、ある事態や組織が存続しおおむね全体社会が機能しているというこの点に照らせば、一般に社会過程はパラドクスの脱パラドクス化の連鎖からなっているとみなすことができる、ということにすぎない（馬場 2015: 408-411; Luhmann 1993(1984), 1995(1984), 2003(1992), 2007(1986), 2014(1991); 高橋 2013; 友枝 2013; cf. 吉田 2016d, 2018)。

ヴェーバー合理化論の文脈に乗せるならば、藏本の議論は、宗教組織における経済に否定的な倫理の彫琢という合理化の実践が論理必然的に経済的合理化を一定程度はともなうというパラドクスの、「不断の試行錯誤」としての脱パラドクス化について論じたものである、といえる（藏本 2014: 266）。この種の脱パラドクス化は、宗教組織にかぎらず、機能分化した現代社会における非営利組織一般におおかれすくなかれみられるものであろう。非営利かつ公共に資する活動を目的とする上では、一定の経済的基盤つまり財力とともに、一定の経営的基盤つまり組織運営力も必要である⁵。芸術事業団体や環境団体 (Baumol & Bowen 1994(1966); 池上 1998; 寺田 2016: 15, 50-82)、病院や学校にも、これは当てはまる。医療や教育の専門家として知識と経験を積んだそれらの組織の管理職者には、当該組織が医療や教育の専門的サービスを十分に提供するために、経済・経営の才覚が要求される。さらにいえば、利益追求や組織管理をむしろ一義的な関心事とする医者や教育者も存在するという点に、その脱パラドクス化がある意味で転倒したかたちで現実社会にあらわれる様を看取することもできる。いずれにせよ、ある組織がある目的を遂行しようとするれば、当の目

⁴ パラドクスとジレンマは、厳密には区別されるべき数学・論理学上の概念であるが、ここでは互換的なものと理解しておく。

⁵ 非営利であるがゆえに、当の組織は、企業体や行政体のような効率重視・コスト削減の合理主義にあまり左右されずに目的に向かい合うことが可能な場合がある。また、それによって一定の社会的信頼を獲得することも可能になる。ひめゆり平和祈念資料館も、非営利組織としての同窓会が母体であることが、社会的な評価と信頼を当初から勝ち得たひとつの理由であったと考えられる。ただし、だからといって、非営利組織に、効率重視やコスト削減あるいは官僚制的組織構造といった合理主義的メカニズムが不要というわけではない (Dean 1995; 檜村 2007: 12-27)。

的に向かう合理化とは異質なあるいはそれと相容れない別種の合理化もまた必要となることがあり、組織はそれを脱パラドクス化し折り合いをつけていく必要がある。こうした合理化概念に即した再定式化を、第4点としておく(吉田 2016c, 2016d, 2018)。

さて、本稿がひめゆり平和祈念資料館に注目するのは、この資料館の母体であるひめゆり同窓会が、学校・病院・教会・寺院などのように、やはり非営利の組織であるにもかかわらず、あるいはむしろそうであるがゆえに、一定の経済・経営の基盤が必要であるという脱パラドクス化の契機に加えて、組織の存続条件をもたないというパラドクスを脱パラドクス化した点において、特異な性格をもった組織であるからである。これが第5点である。ルフェーヴルが「共同体を世代から世代へと伝え、その仕事と秘密を相わち、共通の遺産を受け継ぐべき子孫が必要である」と述べるように(Lefebvre 1968(1957): 183-184)、人間のつくる組織は、時代を経るにともなって成員を更新させ維持存続をはかるといふ、広義の経済・経営原理を内在させている。たとえば、聖職者の婚姻と子孫形成を禁じる宗教においても、在家集団からの成員補充が聖職者組織の存続を可能とするなど、およそ人間の組織たるものは成員の欠損に対応するメカニズムを有する。しかし、この同窓会は、そうした次世代成員の再生産を当初からなしえないものとして戦後に誕生したのである。

次節であらためて述べるように、ひめゆり同窓会は、ひめゆり学徒隊で知られる女師・一校女の卒業生が沖縄戦後に自発的に結成した点で、結社的な性格を濃厚にもった組織である。戦禍によっておおくの学友そして学舎を失ったこの同窓会は、同窓会館の管理運営上、財団法人の顔をもつようになった。そして、悲願であった母校の再建がかなわないと悟ったのち、恒久平和を念願する資料館の建設という目的を掲げ⁶、いくつかの困難を克服しながらそれを実現させていった。廃校となった学校の同窓会は、やがて成員が減少し、いつかは解散または廃止となる運命にある時限組織たらざるをえない。そのひめゆり同窓会(正確には財団法人としての同窓会)が、資料館の建設と運営による恒久平和の発信という、およそ同窓会という組織本来の姿には似つかわしくない、また高齢のメンバーからなる時限結社としては相当な困難が予想される活動に邁進したのであり、さらには資料館の未来に鑑みて、時限結社を超越していく組織構造を創出していったのである。ここにあるのは、時限組織の抱える根本的なパラドクスの脱パラドクス化である。とともに、それは、結成後の結社が新たに設定した目的合理的活動を遂行することが、結社それ自体の枠組みからの超出を結果的に導いたという点で、組織論の観点からも興味深い事例を示すものであるといえる。

このように、本稿では、組織の維持存続という通常なら組織が有する内在的メカニズムをもともと欠いたところから出発し、別組織への脱皮というメカニズムを日本復帰後の社会過程の中で駆動させた、ひめゆり同窓会の現在にいたる軌跡を記述することによって、現代社会における比較的小規模な結社の非営利組織の超越の過程を把握しようとする。

3. ひとつになった乙姫と白百合

⁶ ひめゆり平和祈念資料館の運営規則の第2条は、設置の趣旨についての条項であり(第1条は規則の趣旨についての条項)、「恒久平和を念願するため、ひめゆり平和祈念資料館を設置する」とある(財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2002: 307)。

沖縄師範学校女子部（以下、女師）と沖縄県立第一高等女学校（以下、一高女）は、1896年に首里の師範学校内に設立された女子講習科と、1900年に設立された私立沖縄高等女学校とを、それぞれ前身とする。前者の女子講習科は、1910年に女子本科となり、1915年に



写真1 1933~4年ころの相思樹の並木 写真2 女師（右）と一高女（左）の門札
（財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987：8, 12）

沖縄県女子師範学校と改称し、1943年に国立の沖縄師範学校女子部となった⁷。後者の私立沖縄高等女学校は、1903年に沖縄県立高等女学校となり、1928年に沖縄県立第一高等女学校に改称した。ともに県立であった1916年には、財政事情などにより、前者が真和志村（1953年に真和志市となり、1957年からは那覇市に組み込まれた）の安里にあった後者の校地へと移転し、おなじ校舎の併置校となった。校長も合わせてひとりとなり、一部の教員は両校で教鞭をとった。「女師・一高女」と呼ばれたこの学校は、こうしていわばふたつにしてひとつとなった。学校のシンボルともなっていた80メートルほどにわたる相思樹の並



写真3 高女（一高女）と女師の校章（財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）1991：3）

木をくぐり抜けると、校門の右側には「沖縄師範学校女子部」、左側には「沖縄県立第一高等女学校」の門札が掲げられていた（写真1, 2）。1921年に制定された徽章（校章）も、女師は左向きの、一高女（当時は高女）は右向きの百合の花をあしらった、対称的なものであった（写真3）。1927年には、一高女の校友会誌「おとひめ」（1907年創刊）——ただし、ひめゆり同窓会の諸資料では「乙姫」と漢字で表記されることがおおい——と女師の学友会誌「白百合」（1912年創刊）を合併させて「姫百合」とし、また校友会も合併させた（写真4）。女子講習科から数

⁷ 女子師範学校（5年課程）は、このとき、3年課程の師範学校女子部予科と2年課程の師範学校女子部本科からなる体制になった。この予科と本科は、それぞれ現在の中学3年生～高校2年生と高校3年～大学1年に相当し、その上に1年課程の師範学校女子部専攻科（旧女子師範学校専攻科）があった。なお、高等女学校は5年課程を基本としたが、1943年から4年課程となり、これは現在の中学1年生～高校1年生に相当した。これを修了すれば師範学校女子部本科に進むことができた（ひめゆり同窓会相思樹会（編）1998：4-5；公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2008：17-18）。

えて40年、女師の25周年、私立から数えて一高女の35周年の節目となった1935年には、共通のものとしての同窓会館が、安里の校地のすぐ隣に建てられた(写真5)。同窓会自体はそれぞれ別の組織であったが、建物が共有であったことが、戦後の同窓会の合併につながることになる。両校は、合わせて通称「姫百合学園」とも呼ばれていた。一高女の卒業者の中には女師の本科に進む者もいれば東京の大学に進む者などもおり、女師・一高女は、教員を含め沖縄をリードしていく女性を排出するエリート校であった(ひめゆり平和祈念資料館(編)2010: 66, 225; ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004: 9, 38-41; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団(編)2014: 40-41; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館(編)2008: 7-8, 17-18, 132-139, 2015: 3; 仲程 2012: 184-186; 西平 2015(1995/1972): 15-16; 東京ひめゆり同窓会(編)1966, 1975: 7; 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会(編)1987: 31, 34, 56-68, 104-121, 174, 178, 665-667, 699-700; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)1991: 21, 98, 2004: 2-3, 22-38, 110-111, 246-249)。



写真4 校友会誌
 『姫百合』15号
 (ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004: 23)

写真5 戦前の同窓会館
 (財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)1991: 70)

学校名	戦後の通称	学徒動員数	学徒戦死者数	戦死者数合計
沖縄師範学校女子部	ひめゆり学徒隊	157	81	生徒 211
県立第一高等女学校		65	42	教師 16
県立第二高等女学校	白梅学徒隊	46	17	生徒 58 教師 8
県立第三高等女学校	なごらん学徒隊	10	1	生徒 2 教師 0
県立首里高等女学校	瑞泉学徒隊	61	33	生徒 55 教師 0
沖縄積徳高等女学校	積徳学徒隊	25	4	生徒 28 教師 5
昭和高等女学校	梯梧学徒隊	17	9	生徒 58 教師 4

図表1 沖縄本島地域的女子学徒隊とその戦死者数(公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館(編)2008: 8)より作成

沖縄地上戦がはじまり、女師・一高女の生徒と教員は、1945年3月からいわゆるひめゆり学徒隊を構成し、各地に分散した沖縄陸軍病院の看護要員として働いた。そして、学徒222名中123名（女師81名、一高女42名）、引率教員18名中13名が戦死した。女子学徒隊の中でもっとも死者をおおく出したのがひめゆり、とくに女師出身者であった（図表1）。なお、男子学徒隊では、鉄血勤労隊に入った沖縄師範学校男子部が死者226名で最大であった。女師・一高女の校舎は戦火によって焼失し、廃校となった。生き残ったひめゆり学徒隊のメンバーも散り散りになった（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2008: 8, 30-34, 133-143; 西平 2015(1995/1972); 青春を語る会（編）2006; 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987: 733; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 22-43, 95, 143-147）。



写真6 沖縄文教学校
（那覇市文化局歴史資料室（編）1996: 124）

1946年1月、具志川村（現うるま市）で沖縄文教学校が開学した（写真6）。ひめゆり学徒隊の生存者のおおくが、戦後初の教員養成機関であるこの学校に入った。彼女たちは、そこでようやくたがいに友人の消息を知ることができた。沖縄文教学校の1期生は、2ヶ月間の修業だけで教員免許を与えられた。4月には初等学校令が公布され、当時の沖縄民政府文教部の下で教育行政が再開さ

れた（当初は8・4制、1948年4月からは6・3・3制）。沖縄戦下で学校を修了できなかったひめゆり学徒隊の生存者たちも、教員となって戦後の沖縄教育を支えるようになった。のちにひめゆり平和祈念資料館の運営を担う中心メンバーとなるのは、彼女たち教職者であった⁸。1946年4月7日には、女師・一高女の学徒と教員の殉死者を合祀する慰霊碑が、伊

⁸ 戦後の沖縄における教員組織について、ここで概観しておく。1947年2月に結成された戦後初の教職員組織である沖縄教育連合会は、琉球政府発足とおなじ1952年4月1日に、沖縄教職員会へと改組された。この組織は、法律上は労働組合ではなく、公益社団法人であった。政治的党派からの自律を掲げ、幼稚園から大学、事務職員から校長までの全教職員と文教行政関係者をも網羅した組織であり、51年6月に組織された沖縄教職員共済会に入る条件がこの沖縄教職員会会員であったこともあって、教職員のほぼ100%が会員となった。初代の会長は、元女師・一高女の教員であり、当時沖縄群島政府文教部長の職にあつて、のちに最後の行政主席と復帰後初の県知事を務めた屋良朝苗であった。沖縄教職員会は、沖青連（沖縄青年連合会、58年7月からは沖縄県青年団協議会と改称）とともに、50年代の沖縄の社会運動を担う両輪となった。教員のおおく——50年代後半では7割以上——は琉球大学出身の若い教員であり、彼らは、米軍支配体制への批判と祖国復帰への思いを共有し、地域と密着して行動した。沖縄教職員会は、祖国復帰運動とともに、戦没者慰霊、援護法の沖縄への適用と対象拡大、沖縄護国神社（1940年創建）の再建などにも積極的に関与した。だが、1965年の佐藤首相来沖後の立法院選挙以降、革新勢力の支援に傾倒していき、やがて護国神社関連組織との関係も解消した。66年に社大党がベトナム戦争の泥沼化を受けて基地反対の立場を明確に掲げる——それまで、米軍支配下では慎重にならざるをえない論

原第三外科壕と呼ばれるガマ（壕）の上に建立された。これが「ひめゆりの塔」である。塔建立の主体となったのは、米軍による土地接収によって一時近隣の米須に仮住まいしていた真和志村民であった。村民は、集めた遺骨・遺髪・遺品を、ひめゆり学徒を率いた教員生存者のひとりである仲宗根政善に託し、おおくの遺族に知らせてほしいと頼んだ。そして、彼らは、糸満高校の生徒数名とともに、このガマの周囲を整え、（ひめゆりの花はなかったので）テッポウユリを植え、簡素なコンクリートの慰霊碑を建て、「ひめゆりの塔」と刻んだ。「ひめゆり」というひらがな表記は、ここから戦後に定着したものである。村民と仲宗根らは、このとき簡素な除幕式と慰霊祭をおこなった。この時点では、ガマの中には残された白骨などがまだ確認できる状態であった。1947年には学徒隊死亡者の名を刻んだ銘板が塔の脇に建立され（写真7）、1948年には糸満教会牧師と沖縄基督青年会によって十字架付きの納骨堂が建立されて（写真8）、伊原第一外科壕や荒崎海岸などで収集した遺骨も含めて納められた。今日ここには、沖縄戦で死亡したひめゆり学徒隊の生徒・教員計 227 名が合祀されている（普天間 2015; ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 1-3, 2010: 66, 225; 北村 2009: 137-138; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2008: 204; 小林 2010: 121-125; 仲田 2005, 2008; 仲程 2012; 仲宗根 1983: 127-128; 沖縄県生活福祉部援護課（編）1996: 57-58; 沖縄タイムス社（編）1998: 25; 琉球政府（編）1989(1971): 917; 櫻澤 2015: 11; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 78-81, 95-101）。



写真7 ひめゆりの塔と名を刻んだ銘板（1947年）（財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987: 5）



写真8 納骨堂と十字架（沖縄タイムス社（編）1993(1950): 巻頭）

ひめゆり学徒隊生存者は、たがいに、また女師・一高女の卒業生（上級生）や恩師たちと

点であった——と、沖縄教職員会はこれを支持し、完全に革新の立場となった。68年に行政主席の公選実施が決まり、屋良は当選した。もともと、行政主席としての屋良と、基地撤去・日本復帰をもとめる沖縄教職員会および復帰協（沖縄県祖国復帰協議会）との間には、溝が生まれた。その後、69年の佐藤・ニクソン会談で72年返還が決定すると、復帰協や沖縄教職員会の社会運動における役割も低下していった。71年9月に、沖縄教職員会は労組である沖縄県教職員組合へと移行し、74年4月には日教組に正式加盟した（新崎 2016: 58-69; ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 21; 森宜 2016: 149-153; 戸邊 2008: 158; 櫻澤 2012: 65-129, 193-251, 2015: 43-46, 84-87, 112-114, 127-145, 179-180）。

も、連絡を取り合うようになった。1948年4月には女師・一高女の同窓会が合体・再結成され、戦前の校友会誌の名にちなんで「ひめゆり同窓会」と名づけられた。1940年に発足したものの休止していた同窓会東京支部も、1949年に「東京ひめゆり同窓会」として再発足した（のちに、内地では大阪、福岡、熊本、宮崎、鹿児島に、沖縄では北部、中部、知念、糸満、八重山に、それぞれ支部が結成された）。このときの東京支部メンバーは100名程度であり、その中には姻戚関係等をも含めて各界の有力者につながるネットワークをもつ者もいた。東京支部の有力メンバーはしばしば沖縄に戻り、同窓会本部と連携しつつ、学校再建という悲願の実現について意見交換するようになった。なお、当然ながら、このころの同窓会の中心メンバーは学徒隊生存者よりもはるか上の世代であり、彼女たち生存者はもっとも若い、最後の世代であった（ひめゆり同窓会東京支部（編）1995: 10; ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 119, 225; ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004: 152, 139-147; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団（編）2014: 41; 東京ひめゆり同窓会（編）1966: 1; 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987: 673-676; cf. 女師・一高女ひめゆり同窓会中部支部（編）1999）。

同窓会が結成されたころ、すでにひめゆりの塔は、ロコミによって地元の人々が訪れる名所になっていた。戦後早くから、米軍関係者もここを戦跡観光地として訪れていた。ひめゆりの塔の周囲には店が立ち並び、花を押し売りする者があらわれるなど、およそ慰霊の地としてはふさわしくない、ある種の賑わいや猥雑な雰囲気も醸し出すようになった。慰霊のためにこの場所を訪れる遺族の中には、ガマの中に勝手に入るアメリカ人や沖縄の人々を見て、死んだ娘の墓を踏み荒していると落泪する者もいた。こうした状況を見かねた日系二世の篤志家が、1951年5月に友人とともに集めた寄付金をひめゆり同窓会に贈り、関係者の尽力によって、ひめゆりの塔の立つ土地を地主から買い取ることができた。この年の3月には、真和志村民が、ひめゆり学徒隊の死者全員の御霊をひとつのおおきな位牌（トートーメー）にまとめ、真和志村にある寺院を菩提寺として安置した。真和志村民は、米軍の許可を得て1946年5月に真和志村に帰村していた。こうして、ひめゆり学徒の死者祭祀にもひとつの区切りがついた。この1951年は、仲宗根政善の手記が東京で出版された年でもある。その直後に、これをもとにした映画「ひめゆりの塔」も制作された。1953年1月に内地と沖縄でほぼ同時に封切られたこの映画は、内地・沖縄の双方において好評を博し、大ヒット作品となった。この映画により、「ひめゆり」は殉国美談の象徴的名辞としての位置を不動のものとし、ひめゆりの塔も慰霊観光の主要な訪問地としての地位を確立した。ただし、ひめゆり同窓会関係者、中でも学徒隊生存者にとって、それは強い違和感をともなう事態にはかならなかった。学徒隊生存者たちは、殉国美談に還元できない戦争の悲惨さをかみしめ、死者たちにたいして自分たちが生き残ってしまったことにたいする謝罪の念を強くした（ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 2-4, 8-9; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団（編）2014: 41; 北村 2009: 137-153; 小林 2010: 172-177; 仲宗根 1951; 仲田 2005; 櫻澤 2010: 22; 吉田 2016b; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 80）。

ひめゆりの塔では、6月の慰霊の日に慰霊祭をおこなうようになり、1951年の7回忌ころから、この慰霊祭に参加する同窓生も増えていった。1957年の13回忌には、真和志村民

が建てたひめゆりの塔の側に、白いおおきなコンクリートのひめゆりの塔が立った。1960年には、同窓会を「財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会」として届け出て、これが認可された。旧同窓会館跡地の登記の必要上からであった⁹。1963年には、ひめゆりの塔のガンマ周辺を柵で囲った。塔によじ登ったり、ガンマに入って霊域を荒らしたりする者がおり、これでは亡くなった生徒たちがかわいそうだという声と同窓会の中で起こったからであった。また、この年、同窓会と遺族会——「ひめゆり遺族会」——が費用を折半し、伊原第一外科壕の跡地を購入した（この土地は、1994年に同窓会単独での所有地として保存登記された）。1966年6月には、慰霊祭を重ねる中で旧交を深めた1944年・45年時の在校生、つまり女師・一高女を卒業できずに終戦と廃校を迎えた学徒隊生存者たちが、ひめゆり同窓会相思樹会を結成した（同窓会メンバーの高齢化もあって、相思樹会は1994年にひめゆり同窓会に一本化し、解散した）。1968年に再建された同窓会館は同窓生たちの活動の拠点となり、貸店舗からの収入は同窓会の運営費に充てられた（ひめゆり同窓会相思樹会（編）1998: 365-366, 383-384; ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 18-20, 2010: 119; ひめゆり



写真9 現在のひめゆりの塔

写真8の十字架の下、写真9の右手の小さな石碑が、写真7にある1946年4月に建立された最初の慰霊碑である。写真の白い慰霊塔は、ひめゆり平和祈念資料館20周年に当たる2009年に建て替えられたものである。現在の「ひめゆりの塔」は、写真9にある複数の碑から成る集合体である。

平和祈念資料館資料委員会 2004: 148, 152; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団（編）2014: 41; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2015: 3; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 80-85, 112-114, 126-131, 158-173）。

こうした一連の出来事のあった当時、沖縄を訪れる日本人のほとんどがひめゆりの塔を訪れていたと考えてよい。1967年に沖縄入域旅客数は10万人をこえ、復帰の年の1972年には44万人をこえた。ひめゆりの塔は、慰霊の場所というよりも、こうして増えつづける観光客が訪れ短時間で去っていく観光スポットのひとつとなっていった。1960年代は、沖縄観光が慰霊観光地から亜熱帯の「楽園」観光地へと転換していく過

⁹ 戦後、不在地主の土地は市町村の管理下にあった。同窓会館の跡地を管理していた旧真和志村は、そこがひめゆり同窓会の土地であることは認めたが、周辺を市場（のちの栄町市場）とした。これにたいして、同窓会側は会館跡地の返還を求めたが、代替地を提供されるにとどまった。この代替地は、婦人団体連合会からの申し入れを受けて譲渡した。真和志市が那覇市に組み込まれた後の1966年に市場で火事があり、たまたま戦前の同窓会館跡地の建物が焼失したことを受け、市との交渉の結果、その場所が条件付きで同窓会に返還されることになった。その条件とは、建物の再建後、火事の時までそこにあった店舗を優先的に入居させることであった。こうして、1968年に3階建ての同窓会館が再建された。それまでの同窓会は、拠点をもたず、歴代の同窓会長宅を事務局としていた（ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 18-20; 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987: 667-671）。

渡期であり、復帰後は、いっそうこの転換が進む。ひめゆりの塔は、本島の地上戦終結直後から観光地の様相をもつ場所となっていたが、その後はそうした様相がいっそう強化されることになる。これについては、拙論で論じた（吉田 2016b）。

これに関連して、ひとつ重要な点を確認しておきたい。ここまでのところ、同窓会そして遺族会は、ほぼ一貫して、このひめゆりの塔やそれが位置するガマを死者が眠る墓に相当する「霊域」とみなし、物見遊山的な観光者のまなざしからこれを守ろうとしてきた、という点である。ひめゆりの塔の周囲には、いくつものモニュメント——「赤心の塔」（1948年）、「女神の像」（1951年）、「乙女像」（1952年、台風で倒壊）、「ひめゆり像」（1956年）、旧琉球王家子孫の歌碑（1959年）、「いはまくらの碑」（1990年）、千羽鶴献納堂（1991年）、敷地購入に貢献した日系二世の篤志家の顕彰碑（1997年）など——が寄贈されたり新たに建立されたりした（普天間 2015: 10; ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 12-13; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 82-83, 86-89）。それらも、この塔周辺のいわば霊域性・聖性の維持・確保にとって意味ある付加物であったといえる。そして、この地が観光地化していくこと、慰霊の気持ちをかならずしももたない訪問者が増加することに、同窓会も遺族会も痛惜の思いをもっていた。とすれば、こうした当時の同窓会の態度や認識は、1980年代に資料館の設立を目指して団結した時点での同窓会のそれとは、およそ対照的であるといってよい。後者の時点では、遺族ではない人々の訪問をむしろ積極的に受け入れようとしたのだからである。では、こうした転換は、どのように生じたのであろうか。次に、その経緯についてみていくことにしたい。

4. 資料館というオルタナティブ

同窓会館という拠点を得たひめゆり同窓会では、母校の再建を期待する声が高まり、その検討もはじめられた。とくに東京支部ではこれに積極的な声上がり、1971年5月の東京支部総会では、仮称ひめゆり学園の建設が満場一致で可決された。これを受けて、同窓会本部でも慎重な検討が進められた（財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 16, 2004: 119）。しかしながら、同窓会が母体となって学校をあらたに経営するには、種々の困難があった。

問題のひとつは場所である。周辺地域の開発が進む中、同窓会館のある元校地周辺に学校を再建することは、もはや不可能であった。財源の問題もあった。同窓会館の貸店舗からの収入とあらたに募る寄付によって、学校の建設と運営を安定的におこないうる保証はなかった。さらに、コンセプトの実現という問題があった。同窓会が目指していたのは、単に学校をつくるということではなく、資料館関係者らの言葉を借りれば、「自分たちの後輩にあたる若い世代を育てる」「かつてあった誇るべき女師・一高女の伝統を引き継ぐ学校を再建する」ということであった。また、それは、戦後の学制に即していえば、高校から短大もしくは大学に相当するものをつくるということを含意した。当時すでにあった公立・私立の女子短大に女師・一高女の伝統を引き継いでもらうという案も検討された。だが、これも含め、結果的に、同窓会が高等教育機関である学校を建設したり運営したりするというプロジェクトは、断念せざるをえないという結論に達した。後述する33年忌を迎えた後の1977年

9月の理事会で、これは正式決定され、今後は同窓生名簿と沿革誌(1987年に出版される)の作成に力を注ぐこととなった。ただし、その後、ひめゆりの意思を継ぐ人を養成したいという同窓会の思いは、女子教育のための奨学金制度の創設という方向で検討されることになった。各種の奨学金がある中で同窓会がまたひとつ奨学金をはじめることについては、東京支部からの異論などもあったが、1983年に沖縄県人材育成財団に基金を委託して「ひめゆり同窓会奨学基金」を設立することになった。この奨学基金は、2011年には総額1億円に達し、今日までつづいている(ひめゆり平和祈念資料館(編)2000: 25, 31, 2010: 119; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団 2011; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2004: 119-125)。

さて、このころ、2つの転機となる出来事があった。ひとつは、1977年に戦死者の33年忌がめぐってきたことである。沖縄地域では、33年忌は「終わり焼香」(ウワイスーコー)とも呼ばれ、これをもって通常の死者は祀り上げとなる。この年の6月23日には、摩文仁の平和祈念公園で戦後最大規模の戦没者追悼式が開催され、各市町村の慰霊碑の前でも例年より盛大な慰霊祭がおこなわれた。もともと、それは戦死者の供養にひと区切りがついたということにすぎず、それ以降も諸団体・自治体による慰霊祭は継続された。ひめゆりの塔の前でも、6月19日に33年忌の慰霊祭がおこなわれた。このウワイスーコーで終わりと思わず、みなさんと戦争を忘れず、戦争体験を伝えることが残されたわれわれの使命と考え、恒久平和の新たな出発点と位置づけたい、という追悼の言葉が同窓会長から述べられた。学徒隊生存者たちは、この33年忌慰霊祭において、戦死した学友たちを今後も忘れることはないという思いをあらためて強くし、それを死者の御霊に誓った。そして、遺影を集めて彼女たちが生きた証として残そうというアイディアも生まれた。那覇市がこの年に戦中・戦後の体験記の公募と聞き取りを再度はじめたように、ウワイスーコーは戦争体験とその後の米軍占領下の苦難の記憶を再発見する契機となった。そして1979年3月4日には、戦死したひめゆり学徒隊の人々の卒業式も開催された。遺族にも生存者が卒業証書を手渡しに行ったが、なお娘の帰りを待っていると述べる母や、卒業証書を受け取ってもどうすればいいのかわからないと述べる母もおり、生存者は、生存者として、あらためて遺族の複雑な思いに接することとなった。同様のことは、1995年の戦後50年を機におこなわれた、仏前供養



写真10 「ひめゆりの乙女たち展」(東京)
(ひめゆり平和祈念資料館(編)2010: 9;
ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004:
149)

の際にもあった(ひめゆり平和祈念資料館(編)2000: 23-25, 2010: 152-157, 225, 228; ひめゆり平和祈念資料館資料委員会 2004: 149; 吉田 2016b; 財団法人沖縄県女師・一高女同窓会(編)1987: 299; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2004: 86, 115-118)。

さて、いまひとつの転機は、1980年7月から、朝日新聞社が沖縄タイムス社と共催で「あれから35年 ひめゆりの乙女たち展」を東京と那覇を含む全国9か所で開催し、これが社会におおきな反響

を呼んだことである。なお、那覇では「あれから 35 年 鉄の暴風・沖縄戦の全容」というタイトルでの展覧会となった。ひめゆり学徒隊関係者は、おおくの学徒隊がいた中で、ひめゆり学徒隊だけが強調されて前面に出ることに否定的な考えをもっており、「鉄の暴風展」といった名称にすることを提案したが、朝日新聞社側が「ひめゆり」という名称を付すことで集客力を高められるということを強く主張し、上記の名称に落ち着いたのである。展示内容は、仲宗根の手記をベースにしたものであった。ひめゆり学徒隊生存者は、監修という立場で各地の展覧会の現場に向かった。そのおおくは教員であったので、各自が有給休暇を 2～3 日取得して対応した。彼女らは、このときは証言者として語りをおこなうことはなかったが、あふれるほどの人々で埋め尽くされた会場と、涙を流しながら展示を見る彼らの姿に、直に対峙することになった。監修として展覧会の現場に行ったメンバーの中には、「おおくの人々がひめゆりのことを知らない、ぜひ知ってほしい」という思いを強く抱く者もいた。東京支部では、この展覧会を見たメンバーから、その展示内容をもとに恒常的な資料館を建ててはどうかという話が持ち上がった。上に触れた奨学金制度の創出よりも、資料館の建設こそが同窓会にとってふさわしい活動ではないか、というのである。企画展の終了後、主催者側から展示資料をひめゆり同窓会に寄贈したいという申し入れがあったにもかかわらず、収納場所がないという理由でこれを辞退することとなった、という経緯もあった¹⁰。東京支部の代表 10 名余は、1982 年 2 月に那覇を訪れ、展示資料受け入れのための資料館建設を希望する旨、同窓会本部に伝えた。およそそれまで、同窓会において資料館建設というアイディアは出ていなかった。つまり、この展覧会の成功と残された資料の取り扱い問題が直接の契機となって、母校再建の夢が潰えた同窓会は、資料館建設というオルタナティブに向かい合うことになったのである。高等教育機関の設立もそうであるが、この同窓会による平和資料館の建設も、前代未聞であり、おそらく全国で唯一の取り組みであった（朝日新聞東京本社企画部（編）1980；ひめゆり平和祈念資料館（編）2000：25-26, 31, 2010：9, 119-121, 132；櫻澤 2015：225；財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987：683；財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002：16）。

東京支部からの資料館建設という提案にたいして、沖縄の同窓会本部はかならずしも賛成ではなく、むしろ資金面での負担と中長期的な運営についての懸念から、反対の意見をもつ者がおおかった。沖縄県立平和祈念資料館（2000 年から沖縄県平和祈念資料館）がひめゆりの塔から数キロ東にある摩文仁——その丘の上で第 32 軍の牛島司令官および長参謀長が 6 月 23 日に自決し、沖縄地上戦の組織的な戦闘がほぼ終結した——にすでに建設されており、また、奨学金の創設に向けて準備が進んでいるということもあった。さらに、すでに同窓会のメンバーの大半は 60 代以上、相思樹会のメンバーも 50 代である、という点もあった。しかしながら、一方で、学徒隊生存者の中には、先の展覧会の資料を生かす資料館を建設し、生きたくても生きることができずに戦場で死んでいった学友たちのことを後世に残したい、経験した戦争の悲惨さをおおくの人々に知ってもらいたい、そして戦争の記憶を

¹⁰ この展示資料の一部は、2011 年に東京大空襲・戦災資料センターやひめゆり同窓生の遺族からひめゆり平和祈念資料館に寄贈された（公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2011：1-2）。

風化させてはいけない、という意見をもつ者がおおかった¹¹。仲宗根政善もまた、同意見であった。同窓会幹部と相思樹会のメンバーとが集まって話し合い、後者の複数名から建設を是とする意見が表明されたことを受けて、同窓会長が建設を提案し、反対意見はなく了承された。当時を知るある学徒隊生存者は、仮に採決であったなら反対されていたであろう、同窓会長が採決に付さずに「みなさん、つくりましょう」と述べたことがおおきかった、と述べる。これを受けて、1982年——この年は、歴史教科書の検定で沖縄戦での住民虐殺の記述が問題となった年でもあった——の6月6日の同窓会総会において、「ひめゆり平和祈念資料館」の建設が、500余名の同窓会員の満場一致で承認された。1983年1月からは建設業務を遂行する資料館建設期成会が正式に動き出し、3月には資料館建設時の総合プロデューサーとなるN氏との折衝もはじまった。N氏は、1975年の海洋博の沖縄館の展示や、軍事博物館の様相を色濃くもつかたちで開館した沖縄県立平和祈念資料館のリニューアルなどを手掛けていた。そして、建設予定地、募金の方針、資料館の規模などに関する議論が具体化していった。N氏は、5月に上京し東京支部にたいする説明もおこなった。7月に、期成会は、募金規模を1億2千万円とすることを決め、東京支部との密接な連携の下に建設を進めていくことを確認した。中央の財界などとのパイプもある東京支部のメンバーは、大口の寄付を獲得するべく努力し、企業回りのようなことにも取り組んだと聞く。東京の虎の門ホールを皮切りに、大阪、福岡、沖縄で、資料館建設のための資金を募るチャリティショーも開催した。国や県とは一線を画し、公的資金を入れないというのが方針であった。ひめゆり学徒の生存者の中には、教員を早期退職し、報酬なしの手弁当で、建設運動に奔走するようになる者もいた。結局、1989年8月31日までに、建設資金として2億円強が集まった（ひめゆり同窓会東京支部（編）1995；ひめゆり平和祈念資料館（編）2010：9-10, 31, 119-122, 225；公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団（編）2014：41；本村2016：88-90；櫻澤2015：211, 223-225, 229；財団法人沖縄県女師・一高女同窓会（編）1987：684；財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002：16-17, 24-25, 206-210, 2004：125, 132）。

期成会は、資料館の組織こそ要の問題と認識し、内部にいくつもの委員会を設置した。財務委員会、資料委員会、常任委員会などである。こうして、同窓会は、親睦組織としての一面をもちつつも、資料館建設（のちに運営）の母体組織としての一面を、より強くもつようになった。また、県内の学識経験者や女師・一高女の旧職員を構成員とする顧問委員会も設置した。資料委員会はN氏の発案であった。学徒隊生存者28名から構成された資料委員会は、資料館展示資料の収集・整理そして証言の採録等を担当し、開館までの約7年間、精力的に作業をおこなった。資料委員会は、1985年3月にはひめゆりの塔の立つ伊原第三外科

¹¹ あるひめゆり学徒隊生存者は、糸満の荒崎海岸（写真11, 12）で、米兵の銃の乱射で亡くなった友人の下敷きになって助かった。気がつくと、周囲では教師や他の友人が自決していた。そして終戦から10か月後、収骨のためにその場を訪れると、その友人は、自分が岩にもたれかけさせた姿勢のまま、黒髪を残して白骨化していた。それ以来、彼女はこの海岸もひめゆりの塔も訪れることを避けつづけた。あらためて1972年にその海岸を訪れると、友人の遺体のあった場所にはごみが散乱していた。それを見て、大事なことから目を背けてきた自分を責め、マスコミの取材に応じ、資料館にも関わるようになったという（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010：212；沖縄タイムス2009年6月17日）。戦後ある程度の間時間がたったからこそ、資料館建設は実現したのではないだろうか。

壕に、同年4月には伊原第一外科壕と南風原の沖縄陸軍病院壕に入り、遺骨・遺品の収集調査もおこなった¹²。その背景には、資料館の展示資料の候補が存外すくなかったという事情があった。戦後40年を経て再度入ったこれらのガマでは、遺骨とともに学友の名前の入った筆箱などもみつかった。学徒隊生存者にとって、ガマに入っただけの資料収集は、死んだ学友を思い出させる、耐えがたい心痛をとまなうものであった。また、証言者が忘れたと思っている記憶を思い起こしてもらい記録する作業にも、たがいにおおきな苦しみを感じるようになった。しかし、N氏は生存者が生の声で訴えることの重要性を説いた。戦死したかつての恩師や学友たちの無念を慮ることで、資料委員会のメンバーはこうした精神的負荷に耐えた。「私だけ生き残ってごめんなさい」という親友にたいする気持ちから、館の運営に関わる決意をした者もいる。資料委員会は、同年6月に「写真・図表資料班」「証言資料班」「現物資料班」にそれぞれ分かれ、証言テープ起こしや諸資料の整理作業を進めた。家族との時間を削って夜まで作業をする日々がつづいた（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010：31、



写真11、12 荒崎海岸とひめゆり学徒散華の跡

左写真の前方突端部が荒崎海岸であり、後方には摩文仁の平和祈念公園が見える。荒崎海岸では、教員・生徒あわせ13名が死亡した。終戦直後に遺族が建立した碑は風化し倒壊していたため、1972年に碑が再建された（財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004：84）。

105, 122-127, 212, 225-226; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002：212-214, 238, 256, 2004：134; 沖縄タイムス2009年6月17日; 琉球新報1985年3月23日）。

総合プロデューサーのN氏は、経営的発想にもすぐれた人であり、資料館そのもののあり方を方向づけた。ひめゆり関係者は、資金面からも、遺品の展示を中心とした比較的ちいさな資料館を考えていたが、N氏は来館者が大型バスで訪れることを想定し、広い敷地を確保すべきであると考えた。館が小規模なものであれば人は来ない、ある程度のおおきさが必要である、という見解であった。そして、1日1200人、1年で45万人の入館者があれば資料館は維持できる、といった具体的な数字を挙げて、設定した入館料（大人300円、2014年から消費税増税にともない310円）だけで資料館を維持していくプランを立てた。こう

¹² 伊原第三外科壕では、のちの1993年に2週間にわたる地質学調査もおこなわれた。長期にわたる保存が可能かどうかの確認のためである。壕は、おおきな問題はなく、緊急の対策なしに保存が可能と診断された（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010：35; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004：87）。

した財政の観点から、当初の資料館職員は2名だけであり、ひめゆり学徒隊の生存者も当然のように無報酬で働いた。教員がおおかつた同窓会・期成会のメンバーは、人々に広く戦争の悲劇を伝えたいという思いをもっていたが、事業運営の経験には乏しかった。N氏は、そうした彼女たちの思いの実現に、長期的な経営戦略をもって応えたのであった(ひめゆり平和祈念資料館(編)2000: 33-34, 2010: 133; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2002: 172-181)。

こうした資料館の準備作業に並行して、建設に向けての行政との折衝も本格化した。ひめゆりの塔のある一帯は、沖縄戦跡国定公園の第二種特別地域となっており、県の許可を得なくては資料館建設に踏み出すことができなかった。期成会は、1985年9月に糸満市を介して県に建設許可申請書を提出した。県の担当部署は自然保全課であり、その申請の審議に当たったのは沖縄県環境保全審議会であった。県と審議会は、ひめゆりの塔の後方に資料館を建設する計画となっているが、それではひめゆりの塔の参詣者が資料館入館者を拝むかたちとなり、ひめゆりの塔の尊厳性が損なわれる、そもそも戦後40年「霊域」としてイメージを定着させてきたひめゆりの塔に変更を加えることに問題がある、また、ガマに近接した地下に建造物を建てることには安全上の問題がある、といった点を指摘し、資料館建設に難色を示した。期成会側は、こうした県側の見解にたいして、霊域とはいったい何であるのかについての対抗理論をもち、説得しようとした。そこで、県外にある霊域めぐりを実施した。室生寺、伊勢神宮、那智権宮、高野山などを11月に6日間で訪れたのである。この霊域めぐりによって、霊域とは何かに関する発見・知見はとくに得られなかったが、資料館の建設場所を当初の予定よりも後方にすることで、神聖性を確保する方がよいという認識は得られた。期成会側は、12月に、ひめゆりの塔の敷地にある建設予定地において県の保全審議委員に建設計画を説明したり、建設が自然の破壊につながるという懸念にたいして資料委員会が敷地内の樹木植生分布調査を実施したりし、対応した。そして、1986年3月に、県の要望にしたがって建設予定地を当初の計画からずらす決定をし、これを沖縄県環境保全審議会に申し出た。ひめゆりの塔の霊域としてのイメージを壊そうとするのではない、すでにひめゆりの塔が観光地化している現状を踏まえ、ここをより敬虔な場所にしたいのである、その場合、霊域としての神聖性は保ちたいが、ここは神のいる場所ではない、死者は無念であつたらうし、平和を伝えることこそ大切である、というのが同窓会側の認識・主張であった。いかなる戦争もあつてはならない、戦争の悲惨さと平和の尊さを訴えるのがこの資料館建設の趣旨である、というコンセンサスも固まった。こうしたさまざまなやり取りを経て、1987年3月に資料館建設地となる県有地5278㎡を購入し、同年10月にあらためて糸満市を介して県に資料館建設許可申請書を提出する運びとなった(ひめゆり平和祈念資料館(編)2010: 31, 128-129, 226; 本村 2016: 97-100; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2002: 144-146, 153, 211, 221-226, 239-244, 2004: 135)。

しかしながら、この過程においてひとつの問題が発生した。いわゆるガマ展示問題である。土地の購入後、資料委員会は、ひめゆりの塔の下にあっておおくの学徒が死亡したガマそのものを来館者に見せたいということ、強い要望として提案した。展示資料があまりない中で、ガマこそ戦争の悲惨さを見る者に迫体験させる力をもった第一級の資料であり、ガマ展示の成否が資料館の開館後の運営を左右する、というのである。1980年代の沖縄では、戦

跡であるガンマに入ることが平和学習において効果的であるという考え方やその実践も一部にはあったが、一般の世論においてガンマは神聖視されており、そこに足を踏み入れ見せるということに否定的な考え方は強かった。とくに行政はガンマ展示に否定的であった¹³。同窓会の幹部にも、ひめゆりのガンマに一般の来館者が足を踏み入れることにたいする反対意見があった。安全面の配慮に加え、ガンマは墓場に相当すると捉えられたからである。しかし、ものそれ自体に語らせることの重要性を説く N 氏の説明もあり、同窓会でもガンマ展示を是とする意見が多数派となり、県知事にたいしてガンマの展示を許可するよう陳情書を提出するとともに、ひめゆりの塔の前や那覇の街頭で署名活動をおこなうなどした。新聞の投書欄にも、ガンマ展示に反対する意見と賛成する意見の双方がそれぞれ多数寄せられた。同窓会は、ガンマの実物展示の是非を主題としたシンポジウムも催行した。このシンポジウムでは、ガンマは第一級の資料であって、これを見せることに賛成するという意見と、ガンマはおおくの人々が亡くなった霊域であり墓に相当するものである、それを一般に公開し来館者がいわば土足で踏み込むようにすべきではない、という反対の意見とが交わされた。ガンマ展示案は、最終的に展示室すべてを地下に配し、最後にガンマをガラス越しに見るが、人は入らない、という方向に向かった。だが、県知事が資料館の建設は許可するがガンマの実物展示は認めない、というコメントを出したことを受け、期成会側はこれを決着の機と捉えて、実物のガンマの展示を断念し、代わりに実物大模型のガンマを館内に設けることを決めた。こうして、いよいよ資料館建設は実現に向かったのであった（ひめゆり平和祈念資料館（編）2000: 38-43, 2010: 31-32, 129-132, 226; 小林 2002: 285-288; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 148-153, 155-205, 272-298, 2004: 135）。このガンマのジオラマの作成も、N 氏のアイデアによるものであった。また、同窓会関係者は意識していなかったであろうが、N 氏はガンマ問題が世論の注目を浴びたことの宣伝効果を十分意識していたとも聞く。

このように、ガンマ展示を是とする資料委員会および同窓会の認識は、ガンマを墓に準じる神聖な場所と捉えて遺族ではない一般の人々がガンマに立ち入ることに否定的な行政側（そして世論の一定数）の認識から、すでに隔たったところにあったといえる。前者の霊域観は、第 3 節の終わりに触れたその当時（1970 年代まで）の霊域観——それはガンマ展示問題に対処したときの県側とおなじであったと考えてよい——から変化したのである。彼女たちは、神聖な場所であるがゆえに、それを一般の人々にも開放し、戦争の悲劇を現場での体験から知ってほしい、と願うようになったのである。もともと、現在から振り返れば、資料や遺品の収集のためにガンマに入ること躊躇を覚えた学徒生存者たちが、そのガンマの前で、開館後におこなったような証言を語りえたであろうか、という疑問はある。関係者からもそうした声を聞くことができる。ともあれ、こうした紆余曲折や認識の変化を経て、着工から 7 か

¹³ ガンマを墓に準じるものとして神聖視する認識に加え、行政側がガンマ展示に否定的であったもうひとつの背景があったと考えられる。それは、1975 年の皇太子夫妻（当時）のひめゆりの塔訪問の際の火炎瓶事件である。このとき、ガンマの中に潜んでいた男に皇太子夫妻は火炎瓶を投げつけられた。警察内部では、東京から来た責任者がガンマの事前検索を主張したが、沖縄側の警察がガンマの神聖性を主張してこれに反対し、結果的に事前検索が見送られたという経緯があった（知念 1995; 佐々 2011(2009)）。このことが忘却されていなかったとすれば、ひめゆり同窓会側が来訪者のガンマへの立ち入りを認めてほしいと述べても、行政側がそれを受け入れ、霊域観を転換することは、難しかったのではないだろうか。

月、総工費3億3千万円強（寄付金2億2千万円、銀行借入金1億1千万円）のひめゆり平和祈念資料館は、時代が平成となった1989年の6月23日の慰霊の日に開館した（写真13, 14）。彼女たちは、さまざまな苦労を経験しながら、資料館づくりを、学徒隊の生存者が死者にたいしてもつ「私たち生き残った者の使命」と認識し、これを原動力として、また死んだ学友たちにたいする「ごめんなさい」という思いにも駆られながら、「心をひとつにして」、7年におよぶ無報酬の仕事に打ち込んできたのであった（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 103-104, 131-132, 190; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 135-136）。

同窓会や資料館の関係者は、この開館の日に朝からかなりの雨が降ったことをよく記憶している。生存者たちは、これを沖縄戦に殉じた学友たちの涙——うれし涙か、悲しみの涙かはともかく——と受け取った。10時から開館式があり、車椅子の仲宗根や、ひめゆり学徒隊長の遺児らが招かれ、傘をさしてのテープカットがあった。同窓生、戦死したひめゆり学徒の父母ら遺族、学校関係者を含む、おおくの人々が資料館を訪れ、館内は終日人でごった返しであったという。中には、証言文を読んで涙を流す人、学徒の遺影に向かって語りかける人もいた。慰霊の日であるため、午後2時からひめゆりの塔の前で慰霊祭もおこなわれた。そしてこの日の午後7時から、ホテルで盛大な開館祝賀パーティーがあった。このパーティーの余興のために、同窓生は多忙な中でもしっかりと練習していたという（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 16, 36, 109-110, 240-241; 西平 2015(1995/1972): 192; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 21, 300-301; 沖縄タイムス 1989年6月24日; 琉球新報 1989年6月24日）。



写真13, 14 女師・一高女の校門（1943年）とひめゆり平和祈念資料館（1989年）
（財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 90, 97）
ひめゆり平和祈念資料館が、女師・一高女を模したものであることがわかる。

5. 開館からリニューアルそして未来へ

さて、どれくらい人が来るのだろうかという関係者の懸念に反して、資料館にはおおくの人々が訪れるようになった。初年度は、6月の開館から年度末の3月までの半年で47万人をこえ、その後も年を追うごとに入館者は増加していった。ひめゆり平和祈念資料館の開館前後は、修学旅行の行き先を沖縄とする学校が増加する時期に重なる。これが順調な入館者

増の背景にある点である。開館当初の数年間には個人が7割以上、団体が2~3割であったが、その後団体の割合が増えていった。2010年代では半数以上が団体客であり、そのうち半数は高校生である。入館者がもっともおおかった年は開館10年後の1999年であり、100万人を記録した（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 32, 47-49; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団 2014: 6）。

入館者の増加は、毎日3~4名、学徒隊の生存者が「証言員」として展示室で説明に当たる、つまり生き残ったひめゆり学徒の語りを直接聞くことができるという点が、資料館の特色として認知されていったことにもよる。実は、開館の当初から、学徒隊生存者が毎日展示室で説明に当たるというスタイルが確立されていたわけではなかった。むしろ、彼女たちは、開館前の超多忙な日々を代わって、開館後はやるべき仕事はかなり減るだろう、学徒隊の死者の遺品や生存者の重い証言と向かい合う苦しみから解放されるであろう、と思っていた。しかし、プロデューサーのN氏は、1年間は学徒生存者から説明をしてほしい、と頼んだ。この資料館はものに語らせようとしており、展示にあまり説明をつけていないから、というのがその理由であった。生存者たちは、チケット販売——当初は旅行会社とのクーポン契約がなく、入館者はみな窓口で並んでチケットを買っていた——を含む館の運営業務をこなすとともに、入館者にたいして自らの体験を含む戦争の悲惨さを語るようになった。そして、この生きた語りこそ、入館者に資料館の掲げるメッセージを伝えるきわめて有力な方法であり、その語りの需要もまたおおいということが理解されていった。こうして、1992年に、予約制で、修学旅行生などの団体にたいして30分ほどの講話をおこない、平和学習に役立ててもらおうというスタイルが確立された。ただ、この予約申し込みがおおくなり、運営に支障が生じたため、1995年からは1日の回数を制限するようになった。生存者たちは交替で適宜館内に立ち、質問を受けたり証言をしたりした。ほかに、修学旅行生などの団体が泊まるホテルなどに出向き、館外で語りをおこなう「外部講話」や、バスをチャーターして学徒隊生存者が戦跡を案内する「戦跡めぐり」も、要望に応じておこなった。証言員として人前で話すに際しては、躊躇を覚えるとともに、ある種の勇気も必要となる。死んだ学友の姿が脳裏に浮かぶこともある。ある学徒隊生存者は、自分が重症の学友を置き去りにして撤退したこと、それによって彼女が死んだことへの思いを、当初は語りえなかったが、のちにそれを声にすることができるようになった。証言員をつとめる生存者たちは館の運営の中心メンバーとなり、学芸員とともに資料収集と整理そして展示の企画に関わりつづけた（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 32, 50-52, 67, 102, 105, 108, 131, 190; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2002: 370）。

館内展示は、「沖縄戦前夜」「南風原陸軍病院」「南部撤退」「鎮魂」「回想」の5つのスペースからなり、第4展示室「鎮魂」には死者の遺影が並んだ。この遺影は、33年忌の際に集めたものを使用したものである。当初、ひめゆり学徒隊の遺族の中には、死者を見世物にしているという嫌悪感に近い感情をもつ者もいた。新聞にも、死者を見世物にして金をとっているという批判的な投稿が寄せられることもあった。しかしながら、開館して数年がたつと、遺族の中からも、学友たちといつも一緒にいられてよかったとする肯定的な意見が聞かれるようになった。資料館側は、この第4展示室を遺影の展示室というよりも、遺影を通して死者と向かい合う、まさにレクイエムの空間であると位置づけている。かつていまでも、

死者の遺影に向かいあう際、学徒隊生存者は自然とこうべを垂れたり、心の中であるいは声に出して死者たちに語りかけたりしている(ひめゆり平和祈念資料館(編)1989, 2010: 135-136)。この第4展示室に集約されるように、ひめゆり平和祈念資料館は、まさに平和を祈念する——とともに戦争の悲劇の記憶を再喚起する——空間なのであって、そこに資料館という体裁が付与されているのだと理解される。

1990年には、1周年記念特別展として、「ひめゆりの青春」と題し、ひめゆり学徒隊が軍国少女として教育された状況を描く展示をおこなった。その内容は、のちの展示リニューアルへと引き継がれた。5年目の1994年には、学徒隊生存者の証言映像を制作し、上映会をおこなった。また、5周年記念座談会として、識者7名を招き、次世代に平和をいかに継承するかを主題とした意見交換もおこなった(ひめゆり平和祈念資料館(編)2010: 32, 41, 43-44, 53, 158-160; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2002: 337-340)。

初代の館長は仲宗根政善であった。プロデューサーのN氏との契約は数年におよぶものであったが、その間N氏と同窓会関係者との間には見解の相違が明確になることもあった。仲宗根は、N氏の見解を尊重するよう、教え子たちに語っていたという。その仲宗根は、資料館の順調な運営を見届けるかのように、



写真15 学校跡地の碑(大道小学校)

1995年2月に死去した。ひめゆりだけではなく、全学徒について伝えるべきだ、という仲宗根の意向を受け継いで、1999年には10周年記念特別展として「沖縄戦の全学徒たち」を開催した。また、仲宗根の7年忌に当たる2001年には、仲宗根を主題とした企画展も開催した(ひめゆり平和祈念資料館(編)2010: 36, 42, 143-144, 160-164; 森宜 2016: 148, 185-188; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2002: 343-346)。2002年

7月には、女師の付属小学校を前身とする大道小学校の敷地内に学校跡地の碑を建立した(写真15)。大道小学校は、1946年に豊見城村(現豊見城市)で戦後開校し、1947年にふたたび元校地の安里に移転していた。母校再建の夢が実現しない中、学徒隊生存者にとって、この元付属校の安里での再開と存続は、ひとつの代替的な希望となった(ひめゆり平和祈念資料館(編)2010: 38)。

開館から10年を迎えた1999年から、ほぼ全員が70代となった学徒隊生存者たちは、自分たちがやがて証言員として立つことができなくなるという、近い将来にかならず来る課題に向かい合い、議論をはじめた。これは「次世代プロジェクト」と名づけられた。開館当初は、資料館をいつまでつづけられるものだろうかという思いであったが、すでに資料館は確固たる存在感を示すようになっていた。関係者もそれを自負し、いかに存続させるかが次の課題であるという認識が共有されたのである。可能性としては、将来的に行政に資料館の管理を委ねるという選択もありえたが、公立になれば大切にしてきた資料館の理念が伝わらなくなるおそれがある、という認識が大勢を占めた。また、そもそも戦争責任の観点から

も、また建設時のやりとりの経緯からも、国や県に委ねることには相当な違和感があった。学徒隊生存者たちは、資料館を「後世にずっと継承することが私たち生き残った者の使命」と明確に決意し、自ら後継問題に取り組もうとしたのである。そして、語り継ぐ後継者の育成、生存者の証言映像の恒常的な上映、そのための展示のリニューアルの3つが、具体的に取り組むべき課題と位置づけられた。2003年9月には、その一環として、生存者6名とサポートスタッフがヨーロッパ各地の平和施設を訪れ、今後あるべき展示や企画のあり方を学んだ。館内に証言映像を映すデッキを設置し、証言員の説明がなくても理解できる展示へと切り替えをはかるという案は、この研修旅行から得られたものである。こうした準備を経て、15周年に当たる2004年に展示の大幅なリニューアルがおこなわれた。戦争を知らない若い世代に、わかりやすく語りかける解説と視覚に訴える映像、そして生存者の体験と証言を通して、ひめゆり学徒隊を襲った戦争の悲惨さを伝えることが重視された。新たな第1展示室「ひめゆりの青春」では、戦場に向かう前の学徒の生き生きした姿を強調し、ここから写真・図表・遺品といった視覚的資料を中心に戦争の実態を示す第2展示室「ひめゆりの戦場」、米軍の映像とひめゆり学徒隊の証言を大画面で映す第3展示室「解散命令と死の彷徨」へと導くことで、学徒隊が直面した光と影のコントラストを演出した。第4展示室「鎮魂」と第5展示室の「回想」は、開館時から継承される、亡くなった学徒の遺影と向かい合う空間である。そして、その次にあらたに多目的ホールである第6展示室「平和への広場」を設けた。また、後継者育成の観点から、2005年には証言員の仕事を引き継ぐ「説明員」が1名採用された。2006年には、学芸課と総務課の2課体制とすることで、組織体制のいっそうの充実化もはかられ、2009年には学芸員が2名から3名へ増員され、2013年には説明員・学芸員が合わせて6名になった。これは、博物館としての活動の充実化のためでもあり、学徒隊生存者のマンパワーの減少を補うためでもあった（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 13-14, 32, 44-45, 141, 167-171, 183-185, 261; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）2004: 184-193, 213-217）。

資料館では、来館者が書き記した感想文を年代に分けて保管している。開館以来、毎年2万件ほどの感想文——来館者を年平均80万人とすれば、40人に1人の割合で感想文が綴られたことになる。中には批判的なものもある——が蓄積され、これを文集として刊行してきた。これも、学徒隊生存者の取り組んだ作業のひとつであった。資料委員会メンバーを主軸として開館後に組織された運営委員会は、「感想文集部会」「写真資料部会」「実物資料部会」の作業部会に分かれ、学芸員とともに学芸業務に携わった。この作業部会と運営委員会／資料委員会は、何度も組織体制を再編し、現在にいたっている（ひめゆり平和祈念資料館（編）2010: 32, 52, 64, 231-237, 268-271）。

開館20周年にあたる2009年に、老朽化した白い「ひめゆりの塔」は全面的に改装された。あらたに学徒隊の死者18名の名前を追記し、227名がこの白いひめゆりの塔に刻印されることとなった。20周年記念誌も作成され、資料館の設立から2009年当時までの歩みや秘話が綴られた。20周年記念特別企画展として「ひめゆり学園（女師・一高女）の歩み」も開催され、未公開資料も展示された。開館後20年を迎え、なぜ自分が生き残ったのかと自問していた学徒隊生存者が「生かされている」と感じられるようになった。ただ、その一方で、彼女たちの高齢化と体力の衰えも顕著になってきた。当初28名いた証言員はこの

20年で17名へと減少し、その日の体調により資料館での証言員の仕事を休むという場合も出てきた。これを受けて、上で触れたように、説明員も増員された。また、2012年には、糸満市の平和の語り部育成事業の研修生15名を受け入れて、館内でのガイド研修の機会を提供し、次の世代の語り部の育成にも関わった(ひめゆり平和祈念資料館(編)2010: 174, 197-199, 209-210, 214, 230; 糸満市役所企画開発部秘書企画課(編)2013)。

開館以来、資料館は財団法人ひめゆり同窓会の下におかれてきた。なお、2001年までは同窓会長が財団法人の理事長であった。財団法人ひめゆり同窓会理事会における資料館や館長の位置づけはたびたび改編されたが(ひめゆり平和祈念資料館(編)2010: 231, 234; 財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2002: 310-313, 2004: 158-173)、組織としてもっともおおきな改編となったのは、2011年6月の公益財団法人化であった。「財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会」は、公益法人制度改革にもなつて認可を受け、「公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団」(略称はひめゆり平和祈念財団)へと移行した(公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団 2014: 40)。

現在、ひめゆり平和祈念財団は、1名の代表理事、3名の執行理事(いずれも資料館業務を担当し、1名が資料館館長)を含む6名の理事の、計7名からなる理事会と、同窓会関係者遺族や有識者からなる評議会とにより、運営される組織となっている。同窓会の本部は長らく安里の同窓会館にあったが、2015年には資料館の建物に移転した。ただし、同窓会の親睦活動は、なお安里の会館を拠点として営まれている。2013年4月の時点で証言員は10名いたが、夜にホテルなどでおこなわれることがおおい、修学旅行生などに対応する証言員の館外派遣(外部講話)を、体力面を考慮し、この年の9月末で終了とした。そして、さらに証言員が減少する中で、2015年3月をもって「元ひめゆり学徒による講話」を終了し、説明員や学芸員による「次世代による平和講話」へと引き継ぐこととした。ただし、2018年4月現在も、学徒隊生存者7名が、自らの使命/天職として、可能な範囲で資料館での語りを継続している。2015年5月の定時評議員会では、理事と評議員が改選され、代表理事にはじめて同窓会メンバーでない、元琉球大学教授の有識者が就任した(残る6名の理事のうち、4名は学徒隊生存者、2名は資料館の2課長)。博物館の企画や運営は、2010年代に入って、学徒隊生存者のイニシアティブと作業を中心とする体制から、学芸課の若い世代の職員のアイデアと作業をより生かす方向へと徐々に変わり、財団自体の世代交代・脱同窓会組織化も進んでいる。こうした中で、公益財団法人への移行を機に新規事業として取り組まれたのが、平和研究所の設立準備であった。ひめゆり平和祈念財団は、資料館を未来永劫維持存続させたいと願っている。その一環として、資料館の中に平和研究所を設立するという事業が位置づけられたのである(公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団 2014: 45-47; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館(編)2015: 1-3)。

ある学徒隊生存者は、2015年のインタビューの際に、「遺族の方がこの資料館に来て、遺影に話しかけたりしているのを見て、資料館をつくってほんとうによかった、と思う。もし学校を再建していたら、資料館のようなものもできたのかもしれないが、こういうたくさんの方が来るものではなかつたらう。生き延びた人として、資料館でよかったと、いまは思う」と述べる。

このように、世代の継承の過程にある資料館事業は、現状では順調とあってよい。ただし、懸念される点がひとつある。入館者数の減少傾向である。2009年度にはじめて年間入館者数は80万人台を割り、2010年度以降は70万人台で推移している。こうした減少傾向は、ひめゆりだけではなく、県の平和祈念資料館など、沖縄の他の戦争関連博物館についても指摘できる。とくに沖縄県平和祈念資料館では、小人団体の入館者数は増加傾向にあるのにたいし、個人客および沖縄県内出身の入館者数が顕著な減少傾向を示している。沖縄への入域観光者数は右肩上がり増加しており、その8割はリピーター観光客といわれる。ひめゆり平和祈念資料館の入館者の9割は県外観光者である。一度ひめゆりを訪れた観光者、とくに若い世代の観光者に、ひめゆりのリピーターになってもらう必要がある(公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団 2014: 5, 19; 沖縄県平和祈念資料館(編) 2014: 51; 沖縄タイムス 2013年7月2日)。しかし、内地では、また沖縄でも、若い世代にとっての先の戦争のリアリティが次第に失われてきている現状はある。ますます沖縄が「楽園」イメージにもとづく観光地となっていく中、リピーター増加に向けて何をすべきかについて



写真16 積徳高等女学校慰霊之碑



写真17 白梅の塔

1943年に開学した積徳高等女学校は、1918年に那覇の松山にある大典寺内に開設された私塾を前身とする。この積徳学徒隊の慰霊碑も、大典寺内にある。

白梅学徒隊を構成した沖縄県立第二高等女学校の出発点は、1905年創立の私立那覇女子技芸学校であった。1921年に那覇市立実科高等女学校、1924年に那覇市立高等女学校となり、1928年に沖縄県立第二高等女学校となった。校舎は1944年の十・十空襲で焼失し、民家等で分散授業がおこなわれたが、戦争の激化で学校機能は消滅し、戦後自然廃校となった。白梅の塔は糸満の国吉に1947年に建立され、2度建て直された。なお、現在の松山公園の校地跡には、「白梅の乙女たち」像がある。

での展望は、かならずしも明確ではない。研究所の設立は、財団や資料館の理念のさらなる実現に寄与するものではあるが、経営基盤の強化に直結するものではない。資料館の財政は堅実であるが、入館者の減少傾向は、戦争の悲惨さを知り平和を念願するという資料館の設立趣旨に照らしても、気がかりな点ではある。今後は、増えつづける外国人観光者の来館に向けた取り組みも必要なのではないか、と考える。

ひめゆり同窓会の親睦活動は、近年、メンバーの減少や高齢化により縮小している。6月初旬の那覇のホテルでの総会・パーティー開催は継続されているが、以前のような講演会などの諸活動は2010年代に入って失われ、コーラスグループがすくないメンバーで活動を安

里でつづけている程度である。ひめゆり同窓会と同様、戦後に廃校となった学徒隊生存者が再結成した同窓会は、戦後70年を過ぎた沖縄社会において、いずれも衰退や消滅の段階を迎えようとしている。すでに、いわゆる積徳学徒隊（ふじ学徒隊）を結成した積徳高等女学校の「ふじ同窓会」は、2015年の慰霊の日の戦没者追悼法要において、同窓会の解散を表明するにいたった。戦没者を思えば断腸の思いであったが、高齢化による活動継続の困難さに直面する中での苦渋の決断であった。戦没者追悼法要も、2016年度からは自由参拝となった。同様に、白梅学徒隊を結成した県立第二高等女学校の白梅同窓会も、慰霊祭の自由参加への切り替えを検討しはじめた（写真16, 17）¹⁴。ひめゆりの場合、資料館を建て、組織の強化を進め、次世代の継承者を確保しているため、そうした慰霊祭の継続に関する懸念はない（普天間 2016: 10; 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館（編）2008: 212; 琉球新報 2015年6月24日）。しかし、ある財団関係者は、むしろそこに危機感を覚えている。積徳のように同窓会を解散するにはパワーが必要である、しかし、いまのひめゆり同窓会には解散するだけのパワーがあるように感じられない、というのである。こうした関係者の見立てが正しいとすれば、組織を強化し公益財団法人化したことによって、その影に隠れるかたちで、親睦組織としての同窓会そのものは、その実体性を希薄化させつつある、ということになる。

付言すると、ひめゆり同窓会とくに学徒隊生存者は、資料館が金儲けをしていると思われたくない、という強い思いを抱いてきた。沖縄の方言に「もうきじく」というものがある。儲けのためではなく社会のためだとしながら、実はしっかり儲けている、というあり方を揶揄する言葉である。沖縄社会では、ひめゆりにたいして好意的な見方だけがあるのではない。ひめゆりが突出して知名度が高く、だから戦争体験や悲劇を話して結果的にビジネスをしている、そもそも名もなき人々はただ死んでいったのであって、ある種のエリートであるからこそ悲劇を語るができる、といった意見を、私は本島南部で聞いたことがある。また、ひめゆり平和祈念資料館だけではなく、沖縄の博物館やメディアが一般に沖縄戦がいかにひどいものであったかを繰り返し語るが、庶民が戦争や紛争に巻き込まれ犠牲になるということは世界各地の各時代で起こっているものであって、沖縄戦の悲劇はかならずしも特殊なものではない、むしろ民間人の犠牲という観点から世界各地とリンクすることが重要なのではないかと、しかし、ひめゆりや県の平和祈念資料館はそうした方向に進んでいない、という意見を聞いたこともある¹⁵。平和研究所は、まさにこうした見解にたいする回答となるものであろう。

¹⁴ 沖縄戦の女子学徒隊の有志が結成した「青春を語る会」も、会員の高齢化から、2016年3月26日の月例会で解散を決定した。青春を語る会は、1999年のひめゆり平和祈念資料館での「沖縄戦の全学徒たち展」をきっかけに、ひめゆり以外の学徒隊の生存者がたがいの体験を語り合い連携をはかるため、この年に発足した組織である。当初は、瑞泉・白梅・積徳の元学徒隊生存者7名から出発し、一時期最大で28名の会員がいたが、解散直前は9名となっていた（新崎 2016: 133-134; 中山・平野 2014; cf. 青春を語る会（編）2006; 白梅同窓会（編）2006; <http://ryukyushimpo.jp/news/entry-244371.html>; <http://ryukyushimpo.jp/news/entry-246239.html>）。

¹⁵ こうした観点から資料を収集し、おもに写真を媒体に展示したのが、大田昌秀が立ち上げたNPO法人の沖縄国際平和研究所であった。しかし、2017年の大田の死去の後、同研究所は閉鎖となった。

構想から 10 年を経た 2017 年 10 月 16 日、財団理事長・資料館館長・学徒隊生存者らが参加し、「ひめゆり平和研究所」の開所式が行われた。資料館内に設けられたこの研究所は、資料館資料の整理、戦争体験の継承や展示手法の研究、国内外の団体や研究者との共同事業の実施などにより、ひめゆり平和祈念財団の理念を広く世界に発信することを目指している (<https://ryukyushimpo.jp/news/entry-594848.html>)。2018 年夏には、若者を対象とした映像制作ワークショップ「メモリーウォーク」を開催した。メモリーウォークは、オランダのアンネ・フランク・ハウスが世界各地で実施している平和教育プログラムであり、参加者が専門家とともに学びつつ、短い映像作品をつくり上げるというものである。平和研究所は、資料館と一体となって、今後も財団の理念の実現と情報発信を担うのであろう。ともあれ、公益財団法人としての顔をもったひめゆり同窓会は、資料館の維持・存続という一義的な目的を滞りなく進めてきた。では、以上の記述を、あらためて第 2 節で触れた論点に即して整理しておこう。

6. 組織と霊域観の意図せぬ転換

これまでの記述を振り返り、おもなポイントを確認しておきたい。

ひめゆり同窓会は、沖縄地上戦においてひめゆり学徒隊を結成した女師・一高女の在學生と卒業生が、1948 年 4 月につくった組織である。「ひめゆり」というひらがな表記は、戦後に伊原第三外科壕と呼ばれるガマの上に建てられた「ひめゆりの塔」に由来する。おおくのひめゆり学徒隊メンバーが亡くなったこの場所で催行される慰霊の行事に集う、卒業生および卒業できずに廃校の憂き目をみた学徒隊生存者を中心とした人々は、学友の死と母校消滅の現実に直面し、それゆえに母校再建という悲願を死者とも共有しつつ、1948 年 4 月に新たに同窓会を結成したのであった。こうした経緯に照らせば、この同窓会は、通常あるような同窓会とも、また戦前の女師・一高女それぞれの同窓会とも一線を画す、独特の組織であったことがわかる。とりわけ、第 2 節で触れたように、この同窓会がやがてメンバーが減少し解散または消滅する運命を抱えつつ誕生した時限結社であることが、通例の同窓会と決定的に異なっている。これが第 1 点である。

ひめゆり同窓会は、ひめゆり学徒隊の死を象徴するこの塔とガマのある場所が慰霊の気持ちをもたない物見遊山的な訪問者によって荒らされることに痛惜の思いをもち、篤志家や遺族らの協力をも得て、塔とガマの周囲の土地を購入・管理した。そして、殉死した学友たちを慰め、生き残った者として彼女たちについての記憶が忘却されないよう、6 月の慰霊の日に慰霊祭を毎年おこない、死者の名前を刻んだ純白の慰霊碑を建てた。1960 年には同窓会を財団法人化し、1968 年には同窓会館を建てるなど、組織としての基盤も固めていった。慰霊碑の建立・慰霊祭の継続実施といった活動は、積徳同窓会や白梅同窓会など、母校が廃校となった学徒隊生存者を最後のメンバーとする他の同窓会の活動と、おおきく変わるものではない。差異があるとすれば、それは、ひめゆり学徒隊が小説や映画を通して広く認知され、ひめゆりの塔が突出した戦跡観光地のひとつになっていたこと、戦前の 2 つの同窓会を合体した新たな同窓会を戦後に結成し、かつこれを財団法人化したこと、戦後 20 年以上たってから跡地の火災という偶然的出来事が契機となって同窓会館という母校に代

わる拠点を獲得したこと、である。そして、戦死者の33年忌を過ぎた1980年代になって、ひめゆり同窓会は、他の学徒隊生存者の同窓会と決定的に異なる、およそ全国のどの学校の同窓会もなしえない独自の活動へと、踏み出した。すなわち、反戦と平和を祈念する資料館の建設と運営である。これが第2点である。戦後35年となった1980年に各地で「あれから35年 ひめゆりの乙女たち展」が催行され、これが社会におおきな反響を呼んだ。この展覧会の成功、そして残された展覧会展示資料の取り扱い問題がきっかけとなって、母校再建を断念したひめゆり同窓会は、資料館建設というまったく未知のおおきな目的を設定し、これに向かって邁進することとなったのである。

ただし、振り返ってみれば、その経緯はまさに意図せざる結果と予期せざる出来事の連続であった。これが第3点である。おもな点を再確認しておこう。①そもそも同窓会メンバー、とくに学徒隊生存者は、ひめゆりの塔とそこにあるガマにおおくの観光者が訪れることに強い違和感をもっていた。この場所の俗化・観光地化を押しとどめ、霊域として保持することを望んでいたのである。それが、1980年の展覧会の反響を前にして、おおくの人々に戦争の悲劇と平和の尊さを知らしめることこそ、亡くなった学友たちに報いる自分たち生存者の使命であると、認識を転換させたのである。②資料館建設が議論の俎上に上った当初、同窓会本部は、「ひめゆり同窓会奨学基金」の設立途上にあつたことや財政・経営組織上の懸念から、建設にはむしろ否定的であった。同窓会幹部の会合において、仮に採決がおこなわれていれば、資料館建設は画餅に終わっていた可能性もあった。ところが、資料館建設に積極的な東京支部と学徒隊生存者の意向が同窓会長らの支持を受けて前面に立ちあられ、この奨学基金の設立と並行して、1982年の同窓会総会において資料館建設が満場一致で承認されるにいたつたのである。③同窓会側が漠然ともっていた資料館のイメージを、プロデューサーに起用したN氏が塗り替え、かつそこに具体的な肉付けを施していった。同窓会側は遺品の展示を中心とした比較的ちいさなものをイメージしていたが、これは、一定の広さを持ち、おおくの来館者がバスで訪れる資料館という案へと変貌した。その場合、民間の組織が運営する以上、赤字は許されない。N氏は具体的な数字でもって館の収支バランスの目安を示した。展示品がすくないという問題にたいしては、学徒隊生存者を資料委員会へと組織化し、戦後40年立ち入ることがなかったガマから収集した実物資料と生存者から新たに得た証言資料、そしてウワイスコーの際の遺影写真を組み合わせ、ガマそれ自体を展示資料とするという発想——結果的に実現しなかったが——によってのりこえようとした。開館後に制度化される、学徒隊生存者による語りも、当初は計画になつたものである。付言すれば、学徒隊生存者にとっては、開館後も引き続き超多忙な日々が待っていたという点も、当初の見込みとは違っていた。④建設に向けた具体的作業がはじまると、行政との間に見解の対立が明確化し、折り合いをつけていく必要が生じた。行政側は、ひめゆりの塔周辺を公的に管理されるべき霊域とみなし、民間の非営利組織である同窓会による資料館建設を認めようとしなかつた。その理由づけは同窓会・期成会にとって納得しがたいものであつた。そこにガマ展示問題が発生し、いよいよ行政側と同窓会・期成会側との見解の対立は深まった。沖縄社会の世論も、このときはかならずしも同窓会側寄りとはいえなかつた。しかし、県側が資料館の建設を許可するがガマの実物展示は認めないとしたことを受け、期成会側はここで妥協することが資料館建設には必要と判断し、ガマのレプリカを展示に組み込

みつつ、工事着工に漕ぎ着けたのであった。この行政との折衝過程において、同窓会側は、神聖な場所に来ることで戦争の悲劇と平和の大切さをおおくの人々に体験的に知ってもらうことが重要である、という認識を固めていった。⑤資料館の順調な運営の中で、同窓会は、事後的に、この資料館の未来にわたる維持存続こそ、生存者としての使命であるとあらためて認識した。ここから、財団法人としての同窓会は、時限結社としての自らをいわば脱構築し、次世代の担い手へと資料館の運営を受け渡すため、組織強化と展示の改編とに取り組んだのであった。

このように、ひめゆり同窓会のおこなってきた活動は、その時点では予想も意図もしていなかった転換の連続にほかならなかった。すくなくとも、戦後の同窓会の設立当時には資料館の建設と経営という目標は視野に入っておらず、また、資料館の設立当時には同窓会なきあとの資料館の存続という課題に明確な回答を持ち合わせてはいなかった。そして、それらの転換を導いたといえる、もっとも根本に位置するのが、霊域観の転換であった。当初、同窓会は、ひめゆりの塔とガマのある場所を慰霊の地として守ることに取り組んでおり、その観光地化には否定的であった。しかし、同窓会は、霊域であるからこそ、それを一般の人々に開放して事実を知らしめることが重要であると捉え直すようになったのである。とりわけ、その認識転換は、ガマ展示問題に取り組む中で決定的なものとなった。ここにあるのは、霊域化と観光地化——同窓会関係者に「観光地化」という認識はなかったであろうが、その意図したところは戦争と平和を主題とした学習観光であり、おおくの訪問者は、メディアで知る場所を実際に見聞するというコンテンツツーツーリズムの一環としてここを訪れたと考えてよい——を相反するものとみなす観点から、慰霊化と観光地化を相ともなうものとみなす観点への跳躍である。この、遺族ではない来訪者とともに慰霊を分かち合いたいという思いこそ、ひめゆり同窓会をして資料館設立へと駆動した原理にほかならない。これが第4点である。

そして、2010年代に入って、ひめゆり同窓会は、積徳高等女学校の「ふじ同窓会」のように同窓会の終焉を迎えるのではなく、資料館の母体としては公益財団法人化して、単なる同窓会をこえた組織へと脱皮あるいは進化するにいたった。これも、同窓会としては、およそ当初の想定範囲外にある出来事であった。では、同窓会の資料館建設とこの時限結社からの超越はいかにして可能となったのだろうか。これが第5点である。そこには、ひめゆりならではいくつかの要因や背景が複雑に絡んでいると考えられる。

それを、やや単純化したかたちではあるが、抽出してみよう。①学徒隊生存者が観光者受け入れに否定的な認識から肯定的・積極的な認識へと転換した背景ないし先行要件として、メディア化された「ひめゆりの塔」のイメージの社会的浸透があった。学徒隊生存者は殉国美談のイメージに強い違和感を覚えていたが、このイメージが人口に膾炙していたからこそ、資料館建設のきっかけをつくる新聞社主催の展覧会が開催されたのであり、それが沖縄のみならず全国各地の世論のおおきな反響を呼んだのである。この点で、ひめゆりの塔はコンテンツツーツーリズムの先駆的な存在にほかならない。同窓会も、「[ひめゆりの]少女達の悲劇は全国に語り継がれ知名度も高」という点を自負していたのであり(財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会(編)2002:275)、それを踏まえて資料館建設というおおいなる目的へと向かったといえる。他の学徒隊生存者の同窓会組織には、そうした強いイメージ

も、ひめゆりの塔に匹敵するシンボルも、世論の喚起力も、ともなっていなかった。②組織内的契機としては、戦前の学校組織にあった、教員と生徒および上級生と下級生との間の上意下達的なイニシアティブが、一定の効果をもったと考えられる。さまざまな意見が自由闊達に議論されるという雰囲気になかったわけではないが、同窓会長の「つくみましょう」という発言が契機となって建設提案が満場一致で可決されたことや、節々で仲宗根が果たした役割などに、こうしたイニシアティブのあらわれを看取することができる。③資料館建設へと踏み出すことができた別の要因として、同窓会の財政的安定性があった。これは、貸店舗による収入を指すのではない。ひめゆり同窓会という組織自体が潤沢な資金をもっていたとはいえない。むしろ、①に示したイメージの社会的浸透のおかげで、寄付や募金といった手段によって土地の購入や建設のための資金を集めることができたこと、資料館開館後も予想を超える入館者数によって安定的な運営をおこないえたこと、を指す。突出した知名度という文化資本が、経済上の資本へと転化されえたのである。④加えてもうひとつの重要な資本があった。豊かな人的資源である。ひめゆり同窓会のメンバーの中には、東京・大阪・九州・沖縄において有力者とのネットワークをもつ者もいた。沖縄社会で尊敬を集める教員もおおく、公共の利益のために粉骨砕身働くという心性をもつ者もおおかった¹⁶。政治的な立場や経済的な利害とは一線を画し、あくまで恒久平和の追求を掲げる理念の下に、浄財を広く募って目標の資金を集めることができたのは、ひめゆりの塔と学徒隊がメディア化されたイメージの文化資源をもつとともに、ひめゆり同窓会が人的資源に、そして同窓会長や支部長らのカリスマにも、恵まれていたからである。⑤経営手腕のあるプロデューサーと学徒隊生存者の心血を注いだ努力が有機的に結び合ったことも、重要な要因である。社会に広まったひめゆりのイメージに合致し、かつそのイメージの内奥に向けて人々の心を深く揺さぶる内容を、資料館の展示資料はもちえた。とりわけ、証言員の肉声によって沖縄戦を追体験するという情報提供のあり方は、ひめゆり平和資料館ならではのものであり、それは県の平和祈念資料館をはじめ、他の同様の博物館・資料館の追随を許さなかった。⑥脚注 11でも触れた、好機の到来という点もある。沖縄の復帰により、沖縄と内地とくに東京の同窓会関係者との行き来やコミュニケーションは厚みを増した。戦後 33 年忌を過ぎて、高齢となったとはいえ、逆に子育てからはある程度解放され、場合によっては職を捨ててまで、資料館建設に邁進するマンパワーを結集することもできた。戦争の記憶は、米軍のプレゼンスがなお継続したこともあり、風化することなく、他方で、忘れることのできない苦しい記憶をもちながらも、時間がたったことでそれと向かい合おうという気持ちになることもできた。資料館建設は、戦後数十年の時間経過を必要とした、と私は考える。付言すれば、当時の好調な日本経済が募金や寄付による資金獲得を後押しした点も、時機を得ためぐりあわせであった。⑦最後に、日本復帰後の沖縄の観光地としてのさらなる発展という点も欠かせない。内地からおおくの観光客とくに修学旅行生がやってくることで、資料館は安定的な財政を維持することができ、展示リニューアルや研究所設立を含む、恒久平和の念願という設立の趣旨を今日にいたるまでまっとうすることができた。

16 たとえば、1945年に民間人向けに開設された米軍政府病院では、ひめゆり学徒隊生存者 20 名が、自決した学友たちへの思いを胸に、自ら志願して精神科病棟患者の世話を引き受けた。その献身的な働きぶりは周囲を感動させるものであったという (小椋 2015: 43)。

こういったさまざまな要因のより糸——イメージの社会的浸透、上意下達の組織内イニシアティブ、文化資本の経済資本化、人的資源の豊かさ、プロデューサーのアイデアとその実行、沖縄の観光発展による潜在的な顧客の増大、そしてそれらを生かす好機の到来——が、たがいに意図せざるかたちで結びつくことによって、資料館の設立・運営と同窓会組織の超越は果たされたのであった。

したがって、本稿の冒頭の問いには、さしあたりこう答えることができる。ひめゆり同窓会が財団法人・公益財団法人としての顔をもち、脱時限結社化を果たしえたのは、どれかひとつの要因によるのではなく、新たな目的意識の共有、カリスマの存在、メンバーの個性のアンサンブル、経済基盤、その他の内部要因と外部要因の融合が、時機を得て結び合ったことによるのだ、と。そして、ひめゆり同窓会という比較的小規模な結社の組織構造の根本的变化は、そうした諸要因を抽出し分析することよりも、むしろ詳細な民族誌的事実を叙述することによって、よりよく理解できるということも、また明らかであろう。これこそ、本稿が人類学的な立場からこの組織と資料館を取り上げた所以にほかならない。

ただ、この組織の超越をいかに捉えるべきかについて、私はまだ回答を見出していない。たしかに、公益財団法人化をひとつの節目として、資料館を支える組織基盤は、未来永劫とはいえなくとも、より堅固なものとなった。しかし、それは、廃校となった後にメンバーの追加や補充が絶たれたところで設立された同窓会という、ひめゆり同窓会がもっていた固有の性格から、もはや遠く隔たった感がなきにしもあらずである。時限結社からの超越は、パラドクスの脱パラドクス化といいうるのか、あるいはそう見えて、実は同窓会としての再パラドクス化なのか。それは観察の視点によって異なる。

7. 結びにかえて

最後に、表題について述べておきたい。「現存在」は、いうまでもなくハイデガーの『存在と時間』に由来する。ハイデガーは、存在するというを再帰的に理解する存在者である人間を「現存在」と呼び、その現存在における存在理解を分析していくことで「存在の意味」を問おうとした。その分析においてひとつの重要な契機となるのが死である。死という最後の瞬間をもって現存在の生の全体は完結する。日常において、現存在は諸事に紛れ、自己の死に向かい合おうとはしない。しかし、やがて訪れるであろう死を理解しそれを自ら担うことで、現存在は自らの存在の全体を真に把握することになる。「死への先駆け」という果敢こそ、現存在の本来的な生き方すなわち実存なのであって、ここに存在の時間性もまた看取しうる。ハイデガーは、およそこうした議論を提示した（木田 1983, 2000: 39-44, 65-76; 高田 2014(1996): 200-203, 225-236）。

しかし、このハイデガーの一般化された現存在分析を、本稿の議論対象となるひめゆり学徒隊の生存者やその関係者にあてはめることはできない。なぜなら、彼女たちにとって、死は将来訪れる可能性なのではなく、忘れえぬ過去にあった体験であって、その一種の臨死体験といいうるものこそ、その後の——とくに資料館建設に向かい合ってから——生の出発点となるものであった、といえるからである。それは、おおかれすくなかれ、地上戦を体験した沖縄の人々に共有されるものでもあろう。私は、沖縄社会を戦争と戦後の危機と苦難

の記憶を基盤としたコミュニティと理解する立場から、沖縄の観光について論じたことがある。モーリス・ブランショやジャン・リュック＝ナンシーは、死とくに友人の死を契機とするコミュニティ論の可能性に触れている。本稿のこれまでの議論に照らしてみれば、ハイデガーの分析はむしろ転倒しているとすらいえる。そして、ハイデガーの現存在分析が死の契機を不十分にしか考察していないとし、これを引き取って独自の考察を進めたのが、アガンベンである。彼の『言語活動と死』(邦訳書名は『言葉と死』)は、言葉で語りえない次元にある「声」が存在の否定性や無や死を表現し意志するその一体的あり方を〈死の声〉と名づけ、人間の歴史や倫理の根拠をそうした〈死の声〉や無言の伝達という契機に見出す立場から、「現存在」を規定し直した (Agamben 2009(1982): 15-26, 72, 139, 146-147, 192-198, 200, 202, 236-241; Blanchot 1997(1983); Delanty 2006(2003): 189; Nancy 2001(1999); 西谷 1997: 240-244; 吉田 2016b)。

ひめゆり学徒隊の生存者は、直接の語りを通してであれ、映像や文章などの媒体を通じた間接的なかたちであれ、言葉で語りえない次元にある〈死の声〉を伝えてきた。彼女たちは、自己個人の死ではなく、学友や家族とともに共有されてある死の体験を担い、それにつねに向かい合っただけの後の人生を生きてきたという、アガンベンの意味での「現存在」であると捉えることができる。

ひめゆり平和祈念資料館は、沖縄戦を経験したひめゆり学徒隊の人々の、過ぎ去った過去とはなりえない現在に満ちた、存在論的なトポスである。学徒隊生存者がやがて全員死を迎えても、この資料館が存続するかぎり、ここには沖縄戦をめぐる〈死の声〉が語り継がれていくことであろう。彼女らを取り囲むわれわれにとって、戦後「ひめゆり」という名のもとにひとつの結社組織に結集した現存在とその存在の意味をあらためてそして繰り返し問うていくことが、「戦後ゼロ年」の植民地的支配のもとにありつづける沖縄社会、とくに沖縄本島社会を理解し、ともに生きていくうえで、重要ではないだろうか。

附記

本稿は、基本的に文献にもとづく研究であるが、一部のデータをひめゆり平和祈念資料館の関係者や沖縄本島在住の方々への聞き取りから得ている。お名前は挙げませんが、お世話になった方々に、ここにあらためて深甚の感謝を申し上げます。なお、本稿は、JSPS 科研費 25370956 の研究助成および南山大学 2018 年度パツへ研究奨励金 I-A-2 の助成にもとづく研究成果の一部である。

参考文献

Agamben, Giorgio

- 2001(1998) 『アウシュヴィッツの残りのもの——アルシーヴと証人』、上村忠男・廣石正和訳、月曜社。
2003(1995) 『ホモ・サケル——主権権力と剥き出しの生』、高桑和巳訳、以文社。

2009(1982) 『言葉と死——否定性の場所にかんするゼミナール』、上村忠男訳、筑摩書房。

2012(2001/1990) 『到来する共同体』、上村忠男訳、月曜社。

Anderson, Benedict

1987(1983) 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』、白石隆・白石さや訳、リプロポート。

新崎 盛暉

2016 『日本人にとって沖縄とは何か』、岩波書店。

朝日新聞東京本社企画部 (編)

1980 『あれから 35 年——鉄の暴風・沖縄戦の全容 「ひめゆりの乙女たち」展』、朝日新聞東京本社企画部。

馬場 靖雄

2015 「訳者あとがき」、Niklas Luhmann 『社会の道德』、pp. 406-414、馬場靖雄訳、勁草書房。

Bauman, Zygmunt

2001(2000) 『リキッド・モダニティ——液状化する社会』、森田典正訳、大月書店。

Blanchot, Maurice

1997(1983) 『明かしえぬ共同体』、西谷修訳、筑摩書房。

知念 功

1995 『ひめゆりの怨念火』、インパクト出版会。

Dean, Mitchell

1995 “Governing the unemployed self in an active society,” *Economy and Society* 24(4): 559-583.

Delanty, Gerard

2006(2003) 『コミュニティ——グローバル化と社会理論の変容』、山之内靖・伊藤茂訳、NTT 出版。

江守 五夫

1985 「シュルツ——年齢階梯制の体系的研究」、綾部恒雄 (編) 『文化人類学群像 1 〈外国編①〉』、pp. 100-116、アカデミア出版会。

福間 良明

2014 「沖縄の本土復帰運動と戦争体験論の変容」、難波功士 (編) 『米軍基地文化』、pp. 183-216、新曜社。

福島 在行・岩間 優希

2009 「〈平和博物館研究〉に向けて——日本における平和博物館研究史とこれから」『立命館平和研究別冊』、pp. 1-77、立命館大学国際平和ミュージアム。
(http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-useum/publication/journal/documents/bessatsu_p001.pdf) (2015 年 10 月 28 日取得)

船橋 晴俊

1994 「組織」、見田宗介・栗原彬・田中義久 (編) 『[[縮刷版] 社会学事典』、pp. 566-567、

弘文堂。

普天間 朝佳

2015 「ひめゆりの塔の歴史 (前編)」『ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより』第56号: 9-11、公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館。

2016 「ひめゆりの塔の歴史 (後編)」『ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより』第57号: 9-10。

ひめゆり同窓会相思樹会 (編)

1998 『戦争と平和のはざままで——相思樹会員の軌跡』、ひめゆり同窓会相思樹会。

ひめゆり同窓会東京支部 (編)

1995 『ひめゆり同窓会——東京支部 55周年記念誌』、ルック。

ひめゆり平和祈念資料館 (編)

1989 『ひめゆり平和祈念資料館公式ガイドブック』、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会。

2000 『ひめゆりの戦後』、ひめゆり平和祈念資料館。

2010 『ひめゆり平和祈念資料館 20周年記念誌 未来へつなぐひめゆりの心』、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会立ひめゆり平和祈念資料館。

ひめゆり平和祈念資料館資料委員会

2004 『ひめゆり平和祈念資料館 ガイドブック (展示・証言)』、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会。

石野 径一郎

2015(1950) 『ひめゆりの塔』、講談社。

糸満市役所企画開発部秘書企画課 (編)

2013 『平成 24 年度 平和の語り部育成事業「平和ガイド育成及び平和子ども大使育成」報告書』、平和の語り部育成事業「平和ガイド育成及び平和子ども大使育成」実行委員会。(http://www.city.itoman.lg.jp/docs/2013040100010/files/h24heiwano_kataribe.pdf) (2016年4月28日取得)

女師・一高女ひめゆり同窓会中部支部 (編)

1999 『女師・一高女ひめゆり同窓会中部支部 35周年記念誌』、女師・一高女ひめゆり同窓会中部支部。

柄谷 行人

2006 『世界共和国へ——資本=ネーション=国家を超えて』、岩波書店。

2010 『世界史の構造』、岩波書店。

樫村 愛子

2007 「参加型福祉社会／感情労働／感情公共性」、宮永國子 (編) 『グローバル化とパラドックス』、pp. 9-43、世界思想社。

川田 牧人

2009 「結社」、日本文化人類学会 (編) 『文化人類学事典』、pp. 154-155、丸善。

川村 湊

- 2016 『君よ観るや南の島——沖縄映画論』、春秋社。
- 木田 元
- 1983 『ハイデガー』、岩波書店。
- 2000 『ハイデガー『存在と時間』の構築』、岩波書店。
- 北村 毅
- 2009 『死者たちの戦後誌——沖縄戦跡をめぐる人びとの記憶』、御茶ノ水書房。
- 小林 照幸
- 2002 『21世紀のひめゆり』、毎日新聞社。
- 2010 『ひめゆり——沖縄からのメッセージ』、角川書店。
- 小松 丈晃
- 2003 『リスク論のルーマン』、勁草書房。
- 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団
- 2014 『年報』第25号、ひめゆり平和祈念資料館。
- 公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館(編)
- 2008 『ひめゆり平和祈念資料館 資料集4 「沖縄戦の全学徒隊」』、公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館。
- 2015 『ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより』第56号、公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館。
- 2016 『ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより』第57号、公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立ひめゆり平和祈念資料館。
- 藏本 龍介
- 2014 『世俗を生きる出家者たち——上座仏教徒社会ミャンマーにおける出家生活の民族誌』、法蔵館。
- Lefébvre, Henri
- 1968(1957) 『日常生活批判 序説』、田中仁彦訳、現代思潮社。
- Levi, Primo
- 1980(1976/1947) 『アウシュヴィッツは終わらない——あるイタリア人生存者の考察』、竹山博英訳、朝日新聞出版。
- 2014(2000/1986) 『溺れるものと救われるもの』、竹山博英訳、朝日新聞社。
- Luhmann, Niklas
- 1992(1964) 『公式組織の機能とその派生的問題(上)』、沢谷豊・関口光春・長谷川幸一訳、新泉社。
- 1993(1984) 『社会システム理論(上)』、佐藤勉監訳、恒星社厚生閣。
- 1995(1984) 『社会システム理論(下)』、佐藤勉監訳、恒星社厚生閣。
- 2003(1992) 「非知のエコロジー」、『近代の観察』、pp. 109-167、馬場靖雄訳、法政大学出版局。
- 2007(1986) 『エコロジーのコミュニケーション——現代社会はエコロジーの危機に対応できるか?』、庄司信訳、新泉社。
- 2014(1991) 『リスクの社会学』、小松丈晃訳、新泉社。

- 2015(2008) 『社会の道德』、馬場靖雄訳、勁草書房。
目取真 俊
2006 『沖縄「戦後」ゼロ年』、日本放送出版協会。
本村 つる
2016 『ひめゆりにさゝえられて』、フォレスト。
村武 精一(編)
1981 『家族と親族』、未来社。
那覇市文化局歴史資料室(編)
1996 『写真でつづる那覇 戦後50年 1945-1995』、那覇市。
仲田 晃子
2005 「「ひめゆり」をめぐる諸言説の研究——アメリカ占領下の沖縄で発行された新聞記事資料を中心に」、『アメリカ占領下における沖縄文学の基礎的研究』、pp. 57-101、平成13年度～平成16年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書。
2008 「「ひめゆり」をめぐる物語のはじまり」、屋嘉比収(編)『友軍とガマ——沖縄戦の記憶』、pp. 107-142。
仲程 昌徳
2012 『「ひめゆり」たちの声——『手記』と「日記」を読み解く』、出版舎 Mugen。
中村 孚美
1984 「都市人類学の展望」、『現代の人類学2 都市人類学』、pp. 7-26、至文堂。
中野 敏男
1994 「結社」、見田宗介・栗原彬・田中義久(編)『[縮刷版] 社会学事典』、p. 256、弘文堂。
仲宗根 政善
1951 『沖縄の悲劇 ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』、華頂書房。
1983 『石に刻む』、沖縄タイムス社。
2002 『ひめゆりと生きて』、琉球新報社。
中山 きく・平野 実季
2014 「白梅学徒隊の証言——戦争の悲惨さと平和の尊さ」、松野良一+中央大学 FLP ジャーナリズムプログラム(編)『証言で学ぶ「沖縄問題」——観光しか知らない学生のために』、pp. 17-33、中央大学出版部。
Nancy, Jean-Luc
2001(1999) 『無為の共同体——哲学を問い直す分有の思考』、以文社。
西平 英夫
2015(1995/1972) 『ひめゆりの塔——学徒隊長の手記 [第三版]』、雄山閣。
西谷 修
1997 「文庫版訳者あとがき」、Blanchot 『明かしえぬ共同体』、pp. 235-252。
小田 亮
2004 「共同体という概念の脱／再構築——序にかえて」『文化人類学』69(2): 236-246。
小椋 力

- 2015 『沖縄の精神医療』、中山書店。
- 岡本 恵徳
- 2007(1969) 「『ああ、ひめゆりの学徒』を読んで」、『「沖縄」を生きる思想——岡本恵徳批判集』、未来社。
- 沖縄大学地域研究所(編)
- 2012 『戦争の記憶をどう継承するか——広島・長崎・沖縄からの提言』、芙蓉書房出版。
- 大城 立裕
- 2002a(1968) 「沖縄自立の思想」、『大城立裕全集 第12巻 評論・エッセイ I』、pp.119-148、勉誠出版。
- 2002b(1972) 「日本人による植民地支配の原型」、『大城立裕全集 第12巻 評論・エッセイ I』、pp.308-314。
- 琉球政府(編)
- 1989(1971) 『沖縄県史 第9巻 各論編8 沖縄戦記録1』、国書刊行会。
- 櫻澤 誠
- 2010 「「沖縄戦」の戦後史——「軍隊の論理」と「住民の論理」のはざま」『立命館平和研究』11: 19-28。
- 2012 『沖縄の復帰運動と保革対立——沖縄地域社会の変容』、有志舎。
- 2015 『沖縄現代史——米国統治、本土復帰から「オール沖縄」まで』、中央公論新社。
- 佐々 淳行
- 2011(2009) 『菊の御紋章と火炎ビン——「ひめゆりの塔」「伊勢神宮」で襲われた今上天皇』、文芸春秋。
- 青春を語る会(編)
- 2006 『沖縄戦の全女子学徒隊…次世代に遺すもの それは平和…』、フォレスト。
- 渋谷 望
- 2003 『魂の労働』、青土社。
- 白梅同窓会(編)
- 2006 『白梅 校友会誌——創立百周年記念号——2006年』、沖縄県立第二高等女学校白梅同窓会。
- 鈴木 謙介
- 2013 『ウェブ社会のゆくえ——〈多孔化〉した現実のなかで』、NHK出版。
- 高田 珠樹
- 2014(1996) 『ハイデガー——存在の歴史』、講談社。
- 高橋 徹
- 2013 「機能分化と「危機」の諸様相——クライシスとカタストロフィーの観察」、高橋徹・小松丈晃・春日淳一(編)『滲透するルーマン理論——機能分化論からの展望』、pp. 181-212、文眞堂。
- 寺田 良一
- 2016 『環境リスク社会の到来と環境運動——環境的公正に向けた回復構造』、晃洋書房。
- 戸邊 秀明

2008 「沖縄教職員会史再考のために——六〇年代前半の沖縄教員における渴きと恐れ」、
近藤健一郎(編)『方言札——言葉と身体』、pp. 155-181、社会評論社。

東京ひめゆり同窓会(編)

1966 『東京ひめゆり同窓会 戦後二十周年記念誌』、東京ひめゆり同窓会。

1975 『ひめゆり同窓会誌 東京支部 35周年記念全国版』、東京ひめゆり同窓会。

友枝 敏雄

2013 「第二の近代と社会理論」、宮島喬・船橋晴俊・友枝敏雄・遠藤薫(編)『グロー
バリゼーションと社会学——モダニティ・グローバリティ・社会的公正』、pp. 163-
182、ミネルヴァ書房。

Tönnies, Ferdinand

1957(1887) 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト——純粹社会学の基本概念(下)』、杉
之原寿一訳、岩波書店。

Weber, Max

1972a(1920-1921) 「宗教社会学論集 序言」、『宗教社会学論選』、大塚久雄・生松敬三
訳、pp. 3-29、みすず書房。

1972b(1920-1921) 「世界宗教の経済倫理 序論」、『宗教社会学論選』、大塚久雄・生松
敬三訳、pp. 31-96。

1972c(1920-1921) 「世界宗教の経済倫理 中間考察——宗教的現世拒否の段階と方向
に関する理論」、『宗教社会学論選』、大塚久雄・生松敬三訳、pp. 97-163。

1972d(1922) 『社会学の基本概念』、清水幾多郎訳、岩波書店。

山田 潤治

2010 「〈脱周縁化〉する記憶——「ひめゆりの塔」の表象」『大正大學研究紀要』95: 154-
172。

山口 節郎

2002 『現代社会のゆらぎとリスク』、新曜社。

吉田 竹也

2013 『反楽園観光論——バリと沖縄の島嶼をめぐるメモワール』、樹林舎。

2016a 「楽園観光地の構造的特徴——シミュラクル、脆弱性、観光地支配」『島嶼研
究』17(1): 1-20。

2016b 「地上の煉獄と楽園のはざま——沖縄本島南部の慰霊観光をめぐる」『人類学
研究所研究論集』3: 41-94。

2016c 「ヴェーバー合理化論の基盤認識と人類学——客観性・因果連関・歴史の叙述」
『アカデミア』人文・自然科学編 12: 1-21。

2016d 「バリ宗教の合理化論をめぐる再検討——ギアツからヴェーバーへ」『文化人類
学』81(2): 302-311。

2018 「合理化のパラドクスをめぐる覚書」『年報人類学研究』8: 137-149。

財団法人沖縄県女師・一高女同窓会(編)

1987 『ひめゆり——女師・一高女沿革誌』、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓
会。

財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会（編）

- 1991 『ひめゆり 女師・一高女写真集』、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会。
2002 『ひめゆり平和祈念資料館——開館とその後の歩み』、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会。
2004 『続ひめゆり——女師・一高女沿革誌続編』、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会。

ひめゆり平和祈念資料館 HP

<http://www.himeyuri.or.jp/JP/top.html>

琉球新報 2016年3月26日・3月27日・2017年10月17日

<http://ryukyushimpo.jp/news/entry-244371.html> (2016年5月26日取得)

<http://ryukyushimpo.jp/news/entry-246239.html> (2016年5月26日取得)

<https://ryukyushimpo.jp/news/entry-594848.html> (2018年5月24日取得)

Keywords

Himeyuri Alumnae, Himeyuri Peace Museum, Transcendancy of Time-limited Association, De-paradoxization of Paradox, Touristification of Holy Place